香譜

一

ヲ 9
808
1

香譜

乾

別
帙 808
卷 1

門 多
帙 808
巻 1-5

宮内省圖書寮

香譜緒言

香材ノ異域ヨリ皇朝ニ入貢セル其起原漠然トシテ歴史ニ傳ハラス既ニ敏達朝ニ聖徳太子焚香ノ事アリ按ニ當時新羅高麗百濟ノ諸蕃迭ニ産物ヲ進調ス左レハ之ヨリ前ニ香木ノ此國ニ貢獻スルヤ論ヲ俟サルナリ蓋焚香式ハ嵯峨朝ニ興サレシヨリ以降王公卿相ニ播傳シ種々ノ香材ヲ和合シ或ハ香木ヲ以テ翫弄品ニ彫刻シ終ニ室内必用ノ調度品トナレリ凡香事ヲ登記シタルモノハ香事抄薫集類抄等アルノミ皆往古薫香ヲ翫好セシ時世ニ纂修シタルモノニシテ近古ニ涉レル香譜アルヲ聞サルシ頃年某ヤリ支那ノ香彙ニ倣ヒ一編ヲ編纂セン事ヲ屬托ス余素ヨリ編修ノ微志アルニ因リ輙ヲ某ノ需ニ應セリ

明治 年 月 日
氏寄贈

爾来務メテ蒐収シ冗ヲ省キ簡ニ従ヒ稍ク三回ノ春秋ヲ閲シ脱稿ニ及ヘリ名ヲ香譜ト曰フ分テ五冊トス既敏達ニ起リ先朝ニ至ル其間二千餘歳ニ係ル正史家乗ノ精確ナル者ハ悉ク之ヲ登録ス然リト雖モ史籍浩繁ナリ余ノ寒士老羸ヲ以テ安ソ能ク之ヲ周悉スル事ヲ得ンヤ加フルニ筐中ニ秘シ世ニ傳ヘサルモ亦尠トセス因テ本編ニ遺漏シタルハ後編ニ追加スルニ止メントス

明治十八年三月

凡例

一本編ハ朝家ニ用ヒラレタル香事ヲ編纂スルモノトス武家ニ渉シテ纂修ニ益ナキモノハ除キタルアリ

一古昔尋フ所ノ香ハ薫香ナリ合香トモ云フ諸香ヲ和合シタルヲ云フ

一沉香ノ一種ヲ尋フハ道誉并ニ義政ニ奥レリ之ヲ十炷香ト云フ其十炷香ノ方式ハ本編ニ之ヲ除クヘシ香道者流ニ質スヘシ

一沉香近代伽羅ト称ス因テ沉香ノ次ニ伽羅ノ項目ヲ挙クヘシ

一香品土産ニ因リ形状ヲ異ニスルアリ又古今ノ差異アリト雖モ本編ハ香品ヲ評スル限リニ非ス

一本編ハ原書ノ体裁ヲ更ニセス下ニ引書ヲ掲示スヘシ直
筆ナルヲ示ス所以ナリ
一引書ハ確実ニ明ナル説ヲ挙ク佛家ノ奇談并ニ香道家ノ
牽強附會ハ措テ問ハス
一洞物語濱松中納言物語源氏物語等ハ偶言ト雖モ其著述
シタル時世ニハ香伎ヲ愛翫スルニ因リ之ヲ載スヘシ

香譜

引用書目

日本書紀　續日本後紀　文德實錄
三代實錄　類聚國史　太子傳
上宮太子傳補闕記　上宮聖德太子傳抄　扶桑略記
百錬抄　貞信公記　親信記
春記　市堂関白記　權記
左經記　康平記　中右記
後二條関白記　小右記　長秋記
人車記　平記　大府記
台記　李部王記　山槐記
紫式部日記　榮花物語　東鑑

殿暦
台別記
仁平二年帝賀記
中務内侍日記
延德帝八講記
花園天皇帝記
幽齋翁葬礼記
永享九年行幸記
信尋公記
香字抄
古今著聞集
賀陽院水閣歌合
玉海
三長記
高野帝幸記
辨内侍日記
岡屋関白記
園大暦
左記
梵舞記
愚昧記
浅浮抄
河海抄
東三條院瞿麥合
玉藻
明月記
本朝世紀
後深心院関白記
看聞帝記
後法成寺関白記
北山殿行幸記
三藐院関白記
道隆院内府記
祐子内親王家歌合
和漢三才圖會
洞物語
西宮記
後冷泉院根合
應仁記
大鏡
太平記
類聚名物考
帝湯殿上記
增鏡
甘庶記
野史
筑前續風土記
霊異記
寶香藥等抄
源氏物語
大安寺資財帳
濱松中納言物語
日本國惣國風土記
四融院扇合
室町殿行幸記
翁草
蘭奢待考少引
卜養狂歌集
正倉院古文書
塩尻
内裏歌合
拾遺和歌集
東大寺三倉帝開封日記
常山花
時慶卿記
高僧傳
續應仁後記
玉露叢
冠香集略
胡琴教録
十訓抄
譚海

樂說紀聞
後伏見院薫物方
月堂見聞集
雲井市法
後円融院三十三回聖忌諷誦文
白石手簡
仁和寺傳
延喜式
續古事談
叱古婆衣
宇治拾遺物語
拾芥抄
東大寺要録
元亨釋書
二條行幸記
大日本史
喫茶養生記
三ヶ重事
類聚雜例
本草和名
駿河國風土記
法隆寺靈宝目録
續世継
後撰和歌集
朝野群載
本草啓蒙
大和本草
西院八結
鷹司家薫物方
法隆寺伽藍縁起
阿弥陀院宝物目録
法隆寺流記資財帳
寺社宝物展覧目録
唐大和上東征傳
七佛薬師市修法記
和久良半の市法

後拾遺和歌集
思ひの侘の記
樹下集
古今六帖
簾中日記
年中行事抄
調度物語
建武年中行事
新勅撰和歌集
新和歌集
六草の種
和名抄
負觀儀式
負文雜記
續詞花和歌集
殿中日次記
掛物図鏡
千載和歌集
雲州消息
枕草子
金葉集
續千載和歌集
鷹司家香名録
薫調集
三十二番職人歌合
東宮年中行事
新後拾遺和歌集
小野宮年中行事
後水尾天皇年中行事
禁裡院中内々古規式
近代年中行事
内々行事
備中守忠実朝臣女子歌合
佳節録
三愛記
尊勝寺供養記

蜻蛉日記
年中行事秘抄
身の固
和訓集
紹巴富士見道記
耳塵抄
路水閑談
菅家文集
田氏家集
江北記
香之記序
本朝無題詩
新古今和歌集
類聚雜要
江家次第
雅楚狂醉集
後小松院薫物方
花鳥餘情
童豊卿記
法性寺関白御集
文華秀麗集
三玉和歌集
岷江入楚
新撰朗詠集
文安御即位調度図
九條家薫物相傳次第
慈恵大僧正御遺告
聚集第行幸記
尺素往来
東大寺造立供養記
簾中日記附録
賊光源氏物語詩
拾遺愚草
蒼山集
朗詠百首
新撰万葉集
類題和歌集
三槐和歌集
亭子院歌合
懐風藻
香道和歌集
近代御系譜
二水記
榻鳴暁筆
公卿補任
扶桑西人傳
塵袋
忠利記
古今和歌集
紅塵和歌集
江吏部集
艸山集
自撰集
女院小傳
畫工便覧
満濟准后記
書畫一覧
色葉字類抄
晴右公記
資勝卿記
東國陣道記
東山泉殿香合記
五十四番詩歌合
新拾遺和歌集
稲葉集
西人傳
本朝世事談綺
敦忠集
茶家醉古集
長の夜長物語
晴豊公記
志野流香人名

室町年中行事　　万寶全書　　本草綱目

尊卑分脉　　七十一番職人歌合　　槐記

堂上方故實

香譜第一目録

香品

沉水香　　伽羅
沉水香漂著　　以沉香彫刻物品
曹入沉香　　賜沉香
獻沉香　　贈沉香
宋人贈沉香　　輸入沉香
有名伽羅　　伽羅獨鈷
伽羅觀音　　伽羅油
獻伽羅賜伽羅　　贈伽羅
外蕃贈奇南香　　輸入伽羅
蘭奢待　紅沉香　　截蘭奢待

獻蘭奢待
白檀香
白檀枕
白檀經函
和麝香法
麝香辟蟲毒
麝香入果器
傳麝香
麝香去汗臭
佛前不焚麝香
獻麝香
宋人獻麝香
贈蘭奢待
白檀佛像
白檀念珠
麝香
麝香辟惡夢
服麝香
麝香俑
湯入麝香
麝香奪紅
盜麝香
賜麝香
高麗國獻麝香
附録　獻生麝
贈鬱金香
獻安息香
丁子去汗
服丁子
佛供丁子
贈丁子
宋人獻丁子
雞舌香
年料別貢
焚香祈神
獻青木香
鬱金香
安息香
丁子香
丁子防寒
丁子拂蚊
獻丁子
官丁子香
輸入丁子
木香
市修法焚香
門繫青木香
龍腦香

獻龍腦香
焚香祈事
獻薰陸香
粘薰陸香汁
薰陸香
落髮焚香
宋人獻薰陸香

香譜第一

香品

沉水香

蘇敬注云沉香青桂雞骨淺香馬蹄香等同是一樹也馬蹄香有二種一者沉香之中有似馬蹄者故名馬蹄香二者杜衡葉形似馬蹄故名之葉似橘葉花白子似檳榔大如桑椹紫色而味辛樹皮青色木似槿柳或抄云淺香白壇沉香青桂雞骨馬蹄淺香同是一樹也兼名菀云沉香一名堅黑上品沉梵云阿揭嚕一名堅黑一名黑沉一名密香一名繫香香字抄

證類云似雞骨為雞骨香似馬蹄為馬蹄香枝條細實為青桂薰集類抄

聖德太子傳云沉水香亦名旋檀香木生南天竺國南海之岸

其實雜古其花丁子其脂薫陸沉水久者為沉香不久者為浅香（香字抄○扶桑畧記塵添壒嚢抄並同）

最勝王経七云沉香悪揭嚕烏樞瑟摩明王経上云黒阿迦嚕唐云沉香（宝香薬手抄）

文籍之中説沉香曰栟木出日南欲取當先斫樹著地積外皮自朽爛其心至堅者置水則沉名之曰沉香其次在心皮之間不甚堅精置之水不沉不浮與水平者名曰浅香其最外麤白者曰熏香也沉木葉似冬青樹形業竦又云木極高大也（香字抄○薫集類抄同）

沉香一名堅黒一名黒沉（已上二名出兼名苑）沉香（節堅沉水者也）一名蜜香一名棧香（不沉不浮水平者一名熏香最虛白者已上出疏）浅香ハ色黄ニシテ黒キ筋アリ沉香ニカ糸リタリ沉香ハ色黒クテ黄色交リテ筋ナシ香氣ハ何レモ同シ事ナレトモ委クハ云ヘハ替リアルベシ見別易クシテシカモ別レ難シ深キ水ノ中ニ投シ見ルカヨシ沉香ハ沉メドモ浅香ハ浮フナリ沉香浅香同シ木ナレバ水ニ入テ浮フハ定マリタルコトナレドモ沉香ノ沉ムヘキ理ナシサレドモ木心ニ木ノ脂氣集リカタマリテ去ヌ故ニ石金ニ同シ（浅浮抄）

沉香数品アリ奇南ノ上品トス留青日札曰奇南香名蓋言南方之奇木也亦作奇藍乃沉香木之生結者古人詩多用沉香而不見奇南之名亦遺事也故拾出之○范成大桂海香志ニ沉香ノ事詳也凡諸香南蛮ヨリ多ク出ツ○典籍便覧云木黒潤所出産甚少價甚貴以銀鬻易○今案潛確類書ニモ奇南ヲノセタリ本草沉水香梵書名阿迦嚕香蓋阿迦嚕ら伽

蓋梵語音相近故轉之欤本艸ニ沉香之等尼三沉水香アリ
水ニ入テ沉ム者也棧香アリ入水半沉者也黄熟香アリ不
沉者也黄熟ハ香ノ軽虚ナル者トアリ然レハ黄熟ハ最下
品ナリ○或曰伽羅梵語也凡伽羅文趾為上品暹羅(シヤム)為中品
占城(チンバ)為下品一種沉ノボタトヽアリ尤為下品伽羅ハ焼テ
油色白上沉ハ油赤ク太泥(ダニ)ハ油黒シ沉ノ尤木時々来ル長
二三間ナルモアリ皮ナシ堅シ黄熟ハ軽虚也是上品ニ非
ス奈良ノ蘭奢待ヲ黄熟香トヽハイブカシ本艸ニ曰水ニ
沉ムハ沉香半沉ハ棧香不沉モノハ黄熟香也ト然ラハ黄
熟香ハ今ノヒヨンカツ也最下品ナリ棧香ハ沉香ナルヘ
シ今ハヒヨンカツヲ棧香トヽ本艸ニ伽羅ヲ不載トイヘ
ヒ真沉香即伽羅也太泥ハ然水沉メヒ下品也文趾ハ不沉

トモ最上ナリ不可泥一説大和本草
本綱沉香出天竺諸国其木似白楊(ヤナギ)葉如冬青(ツサキ)而小皮青色経
冬不凋夏生花白而四秋結實似檳榔大如桑椹紫而味辛其
積年老木根外皮幹俱朽爛木心与枝節不壊堅黒沉水者即
沉香也半沉者為棧香与水面平者為雞骨香不沉者為黄熟香其根節軽而大
諸為馬蹄香條謂沉之指最下也挽為焼香　膏脉凝結自朽出者曰熟結刀斧伐仆
膏脉結聚者曰生結因水朽而結者曰脱落因蟲隙而結者曰
蟲漏堅黒者為上黄色者次之角沉黒潤黄沉黄潤蠟沉柔韌
草沉　交横皆不枯如蕾角硬重沉于水下者為上和漢三才図会

迦羅

奇楠(キヤラ)　竒南琪楠竒蓋伽羅今事称之也　伽羅者梵語阿迦嚕香

之畧乎本草彙言曰奇南香原屬沉香同類因樹分牝牡則陰陽形質臭味情性各各差別其沉香為牝陰也味苦陰體而陽用奇南為牡陽也味辛陽體而陰用陳眉公秘笈云奇南出於占城在一山間長禁民不得採取犯者斷其手足彼亦貴重按伽羅乃香木至寶者和漢同貴之然本草綱目不詳辨之何耶蓋沉水香中撰出之撰名稱奇楠奇蓋等乎楠蓋字義不可拘分牝牡亦不然沉水香即奇楠也万安沉香一片價万錢者則可知古者伽羅与沉香不別也其出處亦与沉香同交趾暹羅占城也凡伽羅脂潤柔韌味微辛者佳也不潤或帶白色味微甘者不佳但其香氣美惡以言不可論耳大抵交趾之產最上暹羅者次之占城又次之和漢三才圖會

棋楠香有糖結棋楠鋸開上有油如飴糖黑白相間黑如墨白如燥米焚之初有羊羶微氣有金糸棋楠色黄止有絡若金絲惟糖結為佳考槃餘事

海語曰伽南香々品雜出海上諸山蓋香木枝柯竅露者木立死而本存者氣性皆温故為大螳所穴螳食石蜜歸而遺於香中歲久漸漬木受蜜氣結而堅潤則香成矣其香本未死蜜氣復老者謂之生結上也木死本存蜜氣凝於枯根潤若錫片謂之糖結次也其称虎斑結金絲結者歲月既淺木蜜之氣尚未融化木性多而香味少斯為下耳諸香惟此種不堪入藥故本草不録近世士大夫以制帶銙牽多湊合頗如天成純全者難得耳冠香集畧

[illegible]本邦諺傳曰奇南有五味辛酸甘鹹苦六國之品眞奈賀羅。國。索曾羅。眞奈蟹。伽羅。曾木達羅此所謂六國者未詳按鬻香鄙之老翁語曰四五十有歲以前沉奇南雜入而賈舶載來者也看此則明黄衰海

語謂海上諸山雜出之文意符合者也因形而命名之者別記之矣 冠香集畧

唐船長崎ヘ伽羅ヲ渡スニ皆壺ニ水ヲ入テ伽羅ヲ渡メ持来ル是ヲ日本人水ヨリ揚テ乾ナリ伽羅木ニ不漬ハ香気ナキ故ニ日本ヘテモ水ニ漬シテ来レリ然レハ則本草ニ云沉水香ニ多疑モノナリ沉香ハ水ニ不浸メ其ヽヽ檀ニ入テ渡之香気モ遠ニ芳レリ是本草ノ蜜香ナルヘシ若又本草ノ沉香ヲ今ノ通用ノ沉香トセハ蜜香ト名クル者ハ何ヲ指テ云ヘケン 本艸弁疑

大和本草ニ和俗ニ伽羅ト称スル者ヲ以テ沉香ノ上品トス甚誤ナリ焼タル所ノ香気ニ於テハサモアルヘシ薬用ニ於テハ大ニ異ナリ本沉香奇南香ハ同木ヨリ生レ氏其香トナルニ至テハ別ナリ黎ノ地深山ニ高二三尺モアル大蟻封ノ下ヲ掘レハ其内ニ奇南香アリ又木立死メ其本存スル者ニ大蟻穴居シ其糞水ヲ漬シ年久シクメ奇南香ヲ結スト云然ルすハ蟻ニ因テ香ノ結スル者ハ奇南香ナリ自然ニ結スル者ハ沉香ナリ騏驎竭ト紫鉚トノ如シ本ハ同木ノ香ナレ氏薬性ニ於ハ相反ス奇南香ハ外シ沉香ハ略スコレニ據テ見レハ奇南香ヲ沉香ノ上品トスル者ハ甚誤ナリ 本草啓蒙

廣大和本草云沉水香梵名迦羅と称する物し勢州の吳人書りて予に問ふ今の世に迦羅を好者六国とソハ皆国の名とも是なるヤ否予答云今迦羅と称するを国に拘らず薩迦羅と云ふ沉水香の梵語〻佐曽羅と云ふ地の名

し字或は蔓蘖拉（サツ）は仏又経門多羅といふは蘖門陀拉の
誤りし一化蔓理摩羅字或作佐倚達刺とまた同し羅国と
いふは羅刹国の略し真那盤ハ水盤し真那迦は大秦国の
暦嶺山の陽ノあり蘇とも国ふは那は六国といふ事も又
久しく誤まる変ふして改るは及ひ難し四〻記は沉香は
樹類椿藪鳩斑は奇品しとは又隠密雑志及ひ摺
歳経は埋火香は聞あとあり是今の迦羅きゝの用うる法
のめし類聚名物考

沉水香漂著

推古天皇三年四月沉水漂著於淡路島其大一圍島人不知
沉水以交薪焼於竈其烟氣遠薫則異以獻之日本書紀

参考　聖徳太子傳云土左南海夜有火光亦有聲如雷経卅
箇日矣夏四月著淡路島南岸島人不知沉水以交薪焼於
竈太子遣使令獻其木大一圍長八尺其香異薫太子觀而
大悦奏曰是為沉水香者也亦名旃檀香扶桑畧記○塵添壒嚢抄元亨釈書
薫集類抄
裏書並同

以沉香彫刻物品部

佛像

推古天皇三年四月沉香漂著條云太子奏曰今陛下興隆釋教肇造
佛像故釋梵感徳漂送此木即有勅命百済工刻造檀像作觀

音菩薩高数尺安置吉野比蘓寺時々放光（太子傳○薫集類抄裏書同）

薦河国薦河郡栢原中佛寺天平寶字二年戊戌慶検律師建之安置沉木之釈迦佛（日本惣国風土記）

山巖

仁明嘉祥二年十月嵯峨大皇太后奉賀天皇四十寶筭也其献物市柳頭造沉香山以純金為鶴令銜柳頭花（續日本後紀）

村上天皇天徳四年三月（歌合條）左の方遥々迚き先右の方遥々迚き沉濱を沉香山に似せて鏡を水みして沉の舟うけ（浮）〻り（中略）左の歌〻そゞ迚叶〻なる立洲濱を沉の山邊を水みして洲〻も白〻みの新二つ立て（内裏歌合）

三條天皇長和四年四月（皇女禎子内親王著袴條）供市前物件物櫂大納言（頼通）奉仕也作沉山裁木其上盛物六本（市堂関白記）

後一條天皇長元八年五月（高陽院歌合條）左方畀文臺銀洲濱立沉石以鏡為水以猫鶏金銀作青松昌蒲瞿麦水鳥之類扇十枚書和歌入銀透苔置其上次右方畀文臺洲濱上立沉石作銀瞿麦裁種内銀蝶各書和歌十首（賀陽院水閣歌合○栄花物語左経記並同）

七月（東三條院瞿麦合條）沉の巖黒方を土〻て瞿麦植〻る（東三條院瞿麦合○古今著聞集同）

後冷泉天皇永承五年六月於賀陽院一宮市方有和歌合宮女房所献和歌入香壺管（中略）置洲濱立沉香石立銀鶴一双（祐子内親王家歌合）

同六年五月（内裏根合俗）洲濱を作〻て沉の松を植〻る又同し き鶴を居へ〻る沉香を立て岩石を作〻て立〻る（後冷泉院根合○古今著聞集同）

瓶

村上天皇天德四年三月（内裏歌合 今保）渕濱に沉を山の如くして流
す水のごとくして沉の折うけゝる（内裏歌合）

龜

三條天皇長和二年七月（皇太后宮 御奉產 參皇子 御衣 襁褓 納沉香龜
二居机二脚 權大夫教通奉仕 小右記）
内の大殿より左大將殿まゐらせ給る物の象に大いなる海形をし
て蓬萊の山の下の象の膝まゐらせ香をしき沉を入たり（河物語）

櫛

一條天皇寛弘五年十一月（翌年 吹嘘 中將 使 檜 物 教通 加賀へ送り物 象）
の蓋は白うるはの蓋に櫛いれて沉の櫛白のはの等を
入て使の男女髮搔ゆべき具と見しくて（栄花物語 ○紫

式部日記

大弐の殿より手て取て白金の蓋に沉の櫛を櫛細
なり（櫛）を櫛をとりて内侍のつかさの方にさつ我方にさ
つ（物）
形ある志の中物の洗ひ（苔）の金口の蓋に沉のさし櫛（物語）
めて（細）こまやかにうつくしけなるまゐ（厳）て（上）

扇

四融天皇天祿四年五月（一品の扇 品資の扇 会条 内親王家）沉の骨に杉葉
の織物をたりてそ（四季流扇合）
中納言初成卯の月廿方を云へる条に殿上の人く扇ども
（天）人くい骨に苔綾をし成る白うまこに沉葉檜

の骨ゐなん筋をいと彫物をし給へり　大鏡

鳥羽天皇保延元年六月小弓有無物扇紙十枚有巻付以沉香姫〻方金表紙納沼柳管東長切日依矢負増給〻　中右記

鶴

九日夜大殿の物を大宮の渡給へし御方の岩の上にて立てうし鶴とゝを取て〻見給へる沉の鶴を〻いと美しくて取て〻ゝ雪積ゐと重くて取て〻ゝ雪積ゐ物語

念珠

一條天皇永延二年十月　上皇市受戒條　座主祇奉市念珠二連　一連沉香念珠　小右記

後一條天皇万寿三年正月　上東門院落髪の時賜物の条　皇太后宮妍子の市消息1沉の数珠1黄金の装束〻て白りきの衣多〻納さを多て梅の枝1つきを多て〻　栄花物語

釋深覺右僕射藤師輔之子也住洛東禅林寺張皇密綱治安三年昇大僧正万寿四年春東宮患瘧入凝花舎念不動咒瘧瘧忽除心神如常嘱賜市衣綾服沉香念珠入銀筥　高僧傳

堀川天皇寛治五年十月　関白市讃経有施條　座主沉紫檀念珠二連云〻　後二條関白記

嘉保元年二月初令習初市経市云〻市誦珠未出来仍以蔵人通輔被申殿下則令進上給　沉誦珠虎珀装束　中右記

一條天皇長保六年正月市斎舎講師真興法橋来以沉香念珠為志　市堂関白記

厨子

仁明天皇嘉祥二年十一月皇太子奉賀天皇四十賀等其献

物市厨子二前以薫香作之納琴四面 續日本後紀

吹上宮の儀に出車に沉の棚厨子九具に十六の生物干物

より始めてのいこふを奉りて出る物数を調へ備へ奉る 河物語

つゝめて書き日のきの小屋榙を開く高さ三尺の沉のうつし浅香

の口天の正厨子二具調度ゝる有様清〻しく数を尽してあ

り 日

後鳥羽天皇文治五年八月 没収平泰衡遺財條 當于坤角有一宇倉

廩沉紫檀以下唐木厨子数脚在之 東鑑

二階棚

寝殿に敷設條云母屋の際に香炉の台木丁あとゝくしき板

又尽くゝ以ての沉の二階なとやうに竹を立てゝ仏たゝ奉りてをつらひ奉る 伝氏物語

脇息

醍醐天皇市記云延喜十六年市賀立蒔繪大床子三脚其上

立沉香狭息一脚 河海抄

一條天皇寛弘三年三月 依遷幸清涼殿布設條 又有脇息沉 市堂関白記

近衛天皇仁平二年三月 鳥羽上皇市賀條 立蒔絵螺鈿大床子其上

立沉香市脇息為太上皇市座 人車記

紫

村上天皇天徳四年三月 内裏歌合條 召左右歌右方令持洲濱二

机桑上童女四人畀之立沉机入金筋浅香下机入金銀筋 西宮記 日天暦市記日

三條天皇長和二年七月 中宮市産條 權大夫経房奉仕皇子市

衣 銀苦二合各居浅香苦二脚 權亮能信奉仕市禮禄 銀巌石形二各居浅香紫二脚或云紫上

入鏡為水者　小右記

源中納言殿七日養產條之薄香の薫白つゐ竹樣器こうゐの

[illegible]　河物語

懸盤

一條天皇永延二年十一月　權大納言賀茂[illegible]　其儀不似例賀市前沉香

懸盤六基　小右記

寛弘三年三月　東三條殿花宴　中宮渡於南殿辰時市渡給て奉出

脇沉色盤六派土器香深寸數　市堂関白記

同五年九月　後一條天皇誕生之報出產穢除　宮司大夫[illegible]始めて市書產[illegible]

右京門[illegible]　道々[illegible]の物沉の掛盤白つゐ竹六四　菜花物語。紫式部日記日本至り

記又曰

同七年閏二月　[illegible]　皇大后宮大夫清脇沉小懸盤六　拾記

三條天皇長和二年七月　皇太后宮大夫[illegible]　大夫道綱奉仕市脇沉

懸盤六脚銀器　小右記

同年九月　行幸土御門院　[illegible]條　次供市脇薄香懸盤六脚銀器於市簷

内侍之　日記

同五年六月　遷幸一條院條　次供市脇懸盤沉藤芳間毛銀器　日記

同二年十月　皇女禎子百日市祝盃條　從内被奉市盃六幸以沉香作之有螺

鈿面置銀洲濱其上居盛物　市堂関白記

後一條天皇治安三年四月　一品宮禎子内親王芳條　市方の物方と思て沉藤

芳菜檀の掛盤又白金こうゐの山四とゝを例の中ゝまゝ[illegible]て市掛

盤の面を海の[illegible]ゝて山や海濱のゝゝ作つて[illegible]の物ゝまを

盛ゝゝ　菜花物語

万壽四年三月　[illegible]百日[illegible]条　次供市脇掛盤六基薄香毛以銀器

麝香脳の右記

同年五月（東宮美濃少将後條）次位帝脳掛盤六本淺香香帝脳盤沉香同

長元四年十月（二宮帝芳後條）次位帝前物沉盤盤六脚　右経記

同七年七月（関白左大臣）右宰相中将位帝前物沉掛盤六脚　同

後冷泉天皇康平三年十一月（関白賀大僧正　東九十等條）三淺香懸盤四脚

康平記

鳥羽天皇元永二年六月（皇子帝泰尭条）九夜位前物沉掛盤六脚敷

織物面四角付心葉盤組緒　中右記

敷一入ゐ迄主の院方ゐ宮の方ゐ皆ゐ淺香の事ゐ申めり〳〵きこえ多〳〵院のゐ淺香の掛盤ゐ

ゐ御ゐ皆ゐ皆ゐ皆ゐ皆ゐ皆ゐ原おし拭ひの原氏物語

折敷

朱雀天皇天慶二年八月中宮参予法性寺方法事ゐ〳〵沉香

折敷六枚（銀）浪蓋同籠子ゐ〳〵被裏（貞信公記）

村上天皇天暦三年四月於飛香舎方藤花宴帝折敷四枚之

帝机上淺香折敷沉裏以金閉之　西宮記

同四年十月（義子内親王著袴儀）供進帝者沉香折敷六枚銀蓋様蓋

毎備之　西宮記引吏部王記

一條天皇寛弘三年九月（東宮行啓上東門院覚禅馬条）東宮帝脳実成朝臣

銀高坏二脚深（沉香）折敷　帝皇関白記

同五年九月（後一條天皇三夜内裏条）西まゐりてを大宮（詮子）のおとの

例の沉の折敷ゐ御に人迄とも御らんのし　栄花物語

長保五年四月（道長右大臣者元服条）道長者帝前沉折敷盛蓋ゐ〳〵被奉

彼殿に　拾記

白河法皇皇太后宮の小野山莊に幸せし沉の折敷に玉の杯沉の皿に金の提一ふさを盛られたり　今昔物語集

高倉天皇治承三年正月　東宮市五十日　葉一卿記　摂政上人所

課随時以銀作居沉折敷寛弘如此　山槐記

きこしめす中納言殿より養蓬陽殿に奉ふ　女院の見給ふ物語　沉の折

敷四しき奉りきへて　河物語

女院の居上のおとゝ沉の折敷六ばかり男女ゝ奉りきゝ　沙香の折敷

まへゝ　口

言の葉ゝ　口

言の葉ゝ昭陽舎の御ゝ　又昭陽舎の折敷十二ばかり

ゝゝ　口

言の葉の白川の御ゝ　太皇沙香の折敷十二　口

女院の見給ふ中ゝ　沉の折敷四　口

建和元年三月三日節供ゝ　沉の折敷廿沉のろくろ引の坏

ゝ　口

藤原の机ゝ　三双へて　沉の折敷二十　女院の人ゝ

五月五日節供の御ゝ　沉の折敷廿つゝ　口

内ゝ沙香の折敷ゝ　青ハとろゝさくにし　如さまゝ　口

義忠家　家ゝ　言の葉方ゝ　折敷　沉の折敷　黒檀の高坏

義の　村雲の　十数　折敷　陸奥ゝ　白金の　椎茸ゝ　のさゝつき　銀の

ハ　紺ゝ　口　　原氏物語

主の法師の　ゝて　ゝ　沙香の折敷二つ　許して　義忠さゝつき

たりさしそをり　源氏物語

破子

長元八年五月関白頼通歌合條々左方勝態と定しくて沉
薬櫃の貝ぬり鏡の水中などしるる破子ともあまたぬり　茅花物語
白銀ともの鞘に薄香の折敷十二ぬりしかり檜破子五十沉藤芳
薬櫃ぬとぬり　河物語
三月三日客人ぬの高坏芭蕉を調じぬるに白まの馬に沉の鞍
をきて白まの折敷に引きぬる沉の櫃破子ひと掛あそせ薫物を同
じくにぬ様にぬるを　口
造物所さいを三十人許ゆで沉藤芳莨櫃螺して破子折敷机を
ぬと色々に造る　口
二月中の十日年の始の庚申あまた原中物の許ぬ沉の破子十荷
をぬる　口

唐櫃

蔵開きて見ぬふ多く沉の長櫃の幸櫃十ばかりをきをきぬる　河物語
ぬ野殿内の物をぬ出しぬ文ぬ物をぬめし入ていつくとの多ぬる
沉文箱一具沙香の小唐櫃一ようひ藤芳の蓋ひぬる一具櫃
ぬ出る　口
山伏ぬ出し集め仮面くいを物のまあまた櫃ぬを薄香ぬ沉の足付
て藤芳を枕（アララ）まして白まる地津（統）ぬまり水甕ぬと多のてぬつ
ぬ出しいぬる　口
原中物ぬ多の国ぬ始めし所の拓さいぬまあまた原中物を殿い沉の小唐
櫃のおりしげぬるを造原見して出ぬる　口

折櫃

後堂とり宮の方なる堂にあり多く堂内の沉の折櫃十二ゝ迄
て蓬莱山高坏なとへて　河物語

左の方殿方男女共ひかり許なり　西二年たり　つる絃の白金の梅
二つ　ひしくして白き方梅一梅　あまた方梅一梅　白りものしろ　ゝ忘八つ
ゝ方梅のあるせいちのよくたゝしのよくさ　大きなる沉の折櫃　すきし
いまて　黄金のつゝけの大きなるかさき　白りもの著数多　たゝて　堂
て　多　了　口

衝重

女房の君よべ　後朝　この方のあるを　百　てさて　出　後　中　たの大
殿の沉の御重十二　白りもの　坏　どもあるい上のおくのつゝみ　桂　酒
三　の漢香の御重　南　鮑　ども　口し　数　河物語

吹上の宮の堂　威儀の方殿　沉　堂　沉　黄
櫃の御重　して海山のことの　して　口

飯笥

七日の夜　堂の堂　右大将殿　方　堂　種の御重　廿　沉の飯
笥　坏　ゝ　ゝ　て　河物語

薫壺

経相　三日三の節供　仕　沉の薫壺　六つ　ゝ　て
薫物　て　西沉　一尺　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　威儀の方殿　河物語

壺

三條天皇　長和四年四月　女王　薫物系　進　東　方物　沉香壺六
本　二本　方　細風流　小右記

内々物ども雲種の形象所の事ども八条条々

食料

延喜天皇久安三年三月賀茂祭日七十算条 市前物沉地螺鈿机六前
銀器盛珠玉香薬 在市酒壺並汁物沉形象二枚並桃子 内大臣殿令調武給 中器
市前物目録 中器 一机窪器物四坏 沉一坏為河骨代桂心一坏
代鬢金一坏 為筆代 一机四種四坏筆墨 未詳一坏為雉代煎丁子一
余二種代 一折敷汁物煎丁子青玉平壺四坏一銚子一口煎丁子 坏為雁代又煎丁子二坏為
入之為酒代 白別記

仁平二年三月 鳥羽上皇五十賀後宴條 次兼長卿借窪坏物四坏汁一
坏窪坏沉丁子白檀擬椀子各盤 次教長卿借汁一坏焼物二坏
刻入坏底汁煎丁子居盤 仁平二年市賀記○人車記同
汁実一坏焼物刻入桂心鬢金盛平盤二枚
汁実同盤盛沉居盤一枚
同年八月 忠実公奉賀法皇五十市算後宴條 第一懸盤四種四口 一口入沉泥用雉三口入

香薬煎等 蕚二懸盤窪器四口 擬椀子薫陸桂心 中器 次汁物器 入沉煎
折敷居之云々 次市酒提子如例 人車記
入丁子煎
六條天皇仁安二年正月 胡蘆行幸市聘左大臣死 課條 市飯用白玉喜外物
等併造盛香薬沉丁子類 人車記
後堀河天皇寛喜二年三月 行幸特明院上皇出設条 以泉屋積色々珍寶
作山落瀧泉 沼唐恒屏風半帖 棚脇懸皆作物錦唐物材濃沉
麝丁子之類金銀珠玉之外多他宰相来云作泉形瀧落 かゝ つく
多筆の底也為閉水 材濃漆物代山沼瓶又小瓶薫物沉麝以錦代帝
茶椀枕脇足 欲作黄金廿両為金物 明月記
後深草天皇建長二年十月 朝覲行幸鳥羽殿 懸盤六脚沉地
螺鈿窪器 松枝 四方有金泥銀一脚四種四口 銀器一口沉煎一
口 銀細皮 一口 丁子煎酒代 一口 勝目代一脚窪器四口銀器一口

丁子海月代 一口桂心代 蜆蛤代 一口榎柳子保代夜 一口鬱金細鬱代

一脚玉四坏菓子沼平盤一口黄松実代 一口黄柏実代 一口香

孝代 一口赤柏柏代 一脚玉四坏干物代蒔香玉平盤 一脚玉四坏

平盤 二口青 二口薄青 同打敷二枚面方帽額 一枚玉四坏平盤 青漆蒔

黄香 赤出汁物丁子煎 一枚出酒壷丁子煎在蓋大椀緒張関白記

樹

菊井の宮をいつくしみて菊の花松の枝沉の枝にて金銀瑠璃の

雪を咨きて歌の題書て種松殿物語

客人に京の作法を種松侍りしるる多く海のうちに白う白うもちして

いて今をしるべき物なり沉の枝に似り花を付て清き枝多

めり

鞭

同し除に白うあり馬に沉の鞭を白うの男に引きうり

り

枕

忠兼宰相雅の朴大臣の女に通て寝ぬる夜とも

運ひ花しに遣て沉の枕を添て付て花をこせざりける遣て

云々 拾遺集

鳥羽天皇元永二年四月 之任中将有仁の娘要条 帳中敷繧繝縁畳之

枕当方並沉枕一双 長秋記

後白川天皇保元三年二月 執奪条 障子帳内並沈枕織物並

皇白銀等 人車記

高倉天皇治承四年六月 右大将良通要中 南北妻敷繧繝畳

伯宣兼雅女条

之枕真上敷例蓮真上置沉香枕二 玉海

土御門天皇建久三年三月世日板橋殿おもと殿大臣長女有
入内事名三ヲ　三帖屏風帳中沉香枕　玉葉
後鳥羽天皇文治六年四月　後三位殿入内条沉枕二口以
置之　玉海
堀河　高倉院崩御ニ遇フ象武蔵守師直　ハヒ嘆シ歩ル彷徨テ
少納言の修ヲ面白ク笑ヲ先引出ヲ物ヲ中ヲ見テ面ヲ
小袖十重ヲ沉の枕ヲ取副テ出ル　右手記
後光厳天皇康安元年十二月佐々木佐渡判官入道道誉都落
ヲ眠枕ヲハ沉の枕ヲ鞍ヲ物ヲ取副テ出ル　日
後円融天皇永和元年三月　紀伊守将軍義満条　夜の御殿ヲ紅の御
との丹物沉の御枕庭篠の金鋼縁の筵ヲ敷ル　常ク花
後花園天皇永享九年十月　紀伊守将軍義教方数設条　常御所ヲ御枕二ツ

沉苔絵　宝町殿御事記
後奈良天皇天文二十年三月三好長慶ヲ暗殺条ニ　腰刀ヲ
抜持テ出ヲ二刀突タリケル　長慶元来早業ノ人ナリケレ
ハ床ニ有ケル沉香ノ枕ヲ持テ　刀ヲヒシト請留ケレハ　続應仁後記

管

二月中の十日の頃の庭中の梅の花の木　白ク咲ける枝を
十合ヲ　ヲ沉の透しヲ枝を筆ヲ　ヲの硯箱ヲ
四物語
以て家東方ヲ　ヲ系　頃中の梅の花の木ヲ　枝ひなる
蕊ヲ　ヲして沉の金の箱ヲ　帖ヲ　日
原宰相　ヲ東の夫ヲ　ヲ　ヲ沉の箱ヲ　ヲ　日

小方切しきあをひ大鄭を三とも考るしたき条その三文とも
を沉の名一よりひま反集めていまて方張る年迄あとて口
侍従と香の車ちいとときとのましき沉の名入て いきき
ちあ金原て年迄ふ 源氏物語
二月の十日五梅のさりに名殺々の家国りふ条 あの所仏ふ
こて敷迄ふる梅の枝と付てる文こて年迄ふ沉の名入ふ
の坏二つ出て大きなるしつ入ふて白象紙ふよい五葉
の枝白きまき梅をほりて日しく引結ひふる象の振なる
ふと ものめりしうそ志ふる口 婀娜

村上 天皇天徳三年八月 詩合 條 歌詩十首 書 縹色紙 入淡香
宮 西宮記

朱雀 天皇義平四年十二月 市賀 市賜物 沉の名 一具いまふ

きん 先帝
いの中の茅葉 河海抄引大弓記

四条 天皇天福四年五月一品宮より由親王 南合条 五口しふる
沉の名ふ 他のちあの家の跡を打立まして 格殿 十枝いまふ
日 東宮 南合

醍醐 天皇延喜十四年二月東宮条亭子院其日市福白綾大
袿ふ 淡香宮 居紙壺入沉香也 西宮記
一條 天皇寛弘八年八月 自道長 ふ 彰道由裏 道長 歌物条 又殊歌螺鈿
野剣一勝書法六巻納沉宮二合 一合道風書 二巻 一合唐年三巻 格記
日月 小童元服 加冠 祿物 ふ 書法二巻 一巻道風手 一巻唐年 書法 納沉木螺
細宮以黄柳条 物裏ふ付女 帝花枝 以沼 花枝や 口
後一條 天皇寛仁二年六月 土市門殿 寝殿 砌 諸 文紙 合 宮ふ
伊勢 物 敦光 卿中 経 吳 宮 嵯 歌ふ ふ 又有沉 宮ふ 小右記

堀川天皇康和五年十二月 遠色童紫衣中宮条 女房推物送物手本入
沉菩 以松重薄物裏上付松枝 殿原
崇徳天皇大治四年正月 従三位聖子 入内 本院使沉芳乱菩
薫物使条
薫沼松枝 長寿殿真中納薫物女院使沉菩薫長沼洲濱真上長
鶯参一双中入薫物 中秋記
後白川天皇保元三年十月 宇治大納言 関白
忠通 献物
菩裏 弾付 人車記 院使 沉方 沉手本納
崇徳天皇 長承四年三月 白河院 白河 入仁和寺
自門宮 贈物条 沉手本納沉菩裏
錦 中秋記
四條天皇嘉祐四年四月 小壺白仁和寺
右宰相中将 贈物 手本 大師 沉手本
入錦袋納沉菩
崇徳天皇保延元年二月 大師 五結口裏 玉藻
豫入沉菩
仁和寺
沉菩 宮内卿贈物 大師 沉手本 日

日沉菩裏錦 中秋記
正親町天皇天正十四年十一月関白殿より沉の名香を賜る
内閣殿上記

衣菩

さくしの中物をとのゝ装束の際 沉のこそ 古衣 菩 黄金の香しる
しる六日の事物 手長しゝて 河物語
二の宮殿後の乳母 宰相中将 遣まきをんこそ 方 使 て
多くの物をいろゝ大きなる手の箱こそ一つおいまて
沉の衣箱を結付まてこそ 日
文菩

古野家内の作もの文箱 文箱 枝 て 手 入 て 何 ものゝ
沉文箱一具 枝 て 手 河物語

[illegible]

箸

後花園天皇永享四年三月（将軍義教花頂山遊覧留山入道道珍勝吳祖道）破子箸ハ沉木造
ミ喜上ヲ金蒔ニテタムシ（海海准后記）
同七年四月市氣人条内裏市書杉条破子一合（殊勝ニシ）箸ハ被
下（看聞日記）
室町将軍奢侈ヲ云ヘル条ニ花市覧ノ結構ハ以百味百菜ヲ
作リ山前ノ山相伴衆ノ筯ヲハ金ヲ以テ展之市供衆ノ筯
ヲハ沉ヲ以削之（應仁記）

柿頭臺

正月子の日ハ左大将殿の小方美菜参りあふ条 れ[illegible]しの
臺ハ沉黒檀を仰られ[illegible]（文理）あやめを[illegible]
廿三日ハ年尺の日ハ二条殿ハ[illegible]ハ[illegible]（海槎日記年尺の説）
ハ沉の花足こしらへの白ハ[illegible]ハ[illegible]（壹）ハ[illegible]
正[illegible]ハ[illegible]の方の[illegible]

高欄

後一條天皇長元八年四月上東門院の金堂事院ハ堂庭の
ひし多ク沉黒檀を高欄ハし苔絵螺細梯の台ハ[illegible]
せ[illegible]（栄花物語）

籬

吹上亭の垣をいつる多ク ハ[illegible]を[illegible]る事[illegible]ハし[illegible]（籠）せ
の里ハ[illegible]る黒檀檜ハ[illegible]沉ゆひ（結）結ハ[illegible]の紐して結て[illegible]

の砂崩て黒方を土ましけり　河物語

炬火

吹上の宮まね御佛名に顕て柱に入りぬるあまに黄の子炒橋とり燃
沈のいうい松本てにともしけり（點）　河物語
三月三日節供の条に　沈を庵の細殿して続松にもく（燎）して
夜一夜ともしけり　同

火籠

ちかきわりの宿物の使にちりたる子の火手をほくらしに沈をして黒方を
揚げる布の袋に」「手つけに召いつとや女房の君ふ菓して揚るし
けり　敦忠集

舞臺

吹上の宮の条に　沈の舞臺金の糸して縫わし菊の楽音とも金

銀笥にさなき調へて　河物語

小鳥

春宮に御ひを中納言の妹の許より一尺ふくろ（餌袋）に黒方をひとかしの
やうにあつかして一尺ふくろ沈を小鳥の形にとりあはして青き糸
掛一筋つゞ食ひて結びけり　同

菓

源中納言の吉祥の条に　御前の菓白がねの折敷　河物語

提

同じ条に　白がねの提子にかねの土器ひさげ（提）なを　沈を檜皮色に色どり（彩）
てゆるきこのたつの塗物をしけり　同

遠子

詞殿を云て遠子深くまで遠く白く青く（く）若芽の沈

[illegible] 汨羅

漢庚

[illegible] 玄の樹子を大多のおりの西なり 玉濱庚子を

蓋種 [illegible] 香 白種 [illegible] 細摺 [illegible] 口

貫簀

[illegible] 玄の罠の役を調剪の多く 沉を [illegible] 削りて貫簀白りまの [illegible] 根

口

火桶 火箸

口し多く 沉の火桶白りまけたぎ 沉を火箸にして墨方を柄の

方まて白りまけし

盆栽

[illegible] 沉の宮あるうちあく樹さをまて命ことに [illegible]

の寄せへさきのて [illegible] 汨羅

渕濱 籌

亀山天皇弘長三年九月 亀山殿にて内裏合香 左右方殿より籌して沈

[illegible] 風流の渕濱沉にて [illegible] 上る紙の紙二つる色の色紙を

書きまして [illegible] 籌し沉まて [illegible] 入らる 増鏡

軸

一條天皇寛仁八年八月 写経 条 以青瑪瑙表紙唐紙紙沉木

軸 控記

後朱雀天皇長元年九月 故宣旨六 [illegible] 嘱奏律師令供養仏経

亀紙摺経 詩香 行親記

軸中小書紙

庚

宰相 [illegible] 沉 [illegible] 形 [illegible] 白りまの [illegible] 白金の [illegible]

く置ひて沉を香き節ひて底ニ入て下の足ひニ居て是方を知らし
てそ遣す「ひとつのえふ物の若しきに香りもすくなくやあらう
ん 旧物語

杖

近衛天皇仁平二年八月 忠実公賀法皇五十六算条 法花経机東方傳
立名香杖 沉香如常杖頭二重瑞物五重口包銀 五節畏く鳥口如作銀文 人事記

肖像

正親町天皇天正十年十月 信長葬送大徳寺条 八方興ニ沉香木像
作りたりけり 晴豊公記

船形

後一條天皇長元四年九月 上東門院住吉六幸条 唐座形の船ニ船
形を立て浅沉黄檀などを揃くおのしき振ニ作りけり 栄花物語

礒形

浅香礒形壹在白鶴鳥三重一斤六兩 右一色平城宮御宇
天皇以天平二年歳次庚午七月十七日納賜者 大安寺資財帳

葬礼焚沉香

大なる香炉を五つ入て絶す沉香を割くは連ちて是香四方ニ満てり 幽斎翁葬礼記

冑入沉香

木村長門守重成生害候之夏陣ニハ死を決して冑内ニ蘭
奢待を焼め忍緒の末を絶て討死を諸人ニ示し芳名千載
ニ輝す重成首を井伊家士安藤長三郎其本陣ニ持来して
実検ニ入西ト共ニ首を上覧あり諸人心を付るニ此首甚
薫を阿部備中守本多上野介同心の徐ニ立寄て耳鼻を嗅
ニ口ニハ鶏舌香を含め耳鼻同しく薫薬を詰て向暑蚊砌

宋商廣世聊の奥氣おく童成元来美質如速大喜首の見事さ
諭ふ者多之 翁草

賜沉香

天智天皇十年十月天皇遣使奉沉水香旃檀香於法興寺佛
日本書紀

三條天皇寛弘（長和元）九年五月（皇太后宮奉為先帝從法金剛）宮亦令設之沉香（罠絡）
蘇芳等兩種置棒物之蓋東方 小右記 ○御堂関白記同

正親町天皇永禄七年九月 知恩院老尼小市所見法談中さ
ろ、十帖沉一包下さるゝ、 山槐記上記

元亀（天正元）四年九月 山槐記 ○楊弓の之事ある沉一罠出て竹内
及出さる 日

天正九年四月中山大納言沉香賜ふ 日

後陽成天皇天正十五年七月 施薬院 ○沉の出賜あ
る 山槐記上記

日十六年四月 法皇へ沉五斤 ○馬ヒカ下さる ○度蔭亭 ○法寺中
山し 日

五月 男皇へ沉 ○賜り ○ 日

後水尾天皇元和四年十月 慈利市園反沉香一斤 ○ 孝亮記

獻沉香

後花園天皇永享五年十月 為釈迦堂 ○ 退蔵菴 ○ 退蔵菴記 ○ 今之
礼 ○ 引物沉ノ ○ 一 ○ 東十帖 ○ 不思議 ○ 礼也 ○ 蔭涼軒記
日七年四月 ○ 覚富門殿 ○ 新物条 ○ 麝香 ○ 堆紅 ○ 納沉 日 ○ 納
日 ○ 松条 ○ 日

永享九年十月 紀年義書富士文書物条 沉の香一斤中より出沉 室町殿行幸記○永享九年十月行幸記日

三條天皇長和四年九月 太宰帥年料 文殿物条 唐皮二領一荷納給る香沉香 小右記

後土御門天皇永正五年十月 手渡向田大蔵少輔弘胤為使者来沉ノ力フ屋皇剔紙可令進上 禁裏ニ出中ニ是以奇古薫物来給也彼沉香別以清兒進上ニ女房奉書到来則彼奉書左京大夫 大日義条 実隆ニ時ニ年来ニ実隆ニ記

後奈良天皇天文二十年十二月西国より春松の為て沉香卅斤進上 四湯殿上記

日 廿一年八月 四さ秀関係より上ることて沉一裏進ぜ申 日

正親町天皇永禄十二年九月 吾妻より出焼香の沉三斤来る 日

日 十三年二月 昌泰院代参りの之紀ヨ来る引合十帖沉一斤進上中出方賜ふ 日

天正七年四月 キウ菴より出焼物の香炉沉薫陸 キカウ 奩十斤白檀五斤来る 日

日 十四年三月 通仙法師の出家ニ為て杉原十帖沉十斤進上中院殿通仙院ニ上ル 日

後陽成天皇天正十五年七月 施薬院陣の出家として沉一包進上ル 准后拙筆ヲ

日 十六年四月十五日 紀年大閤秀吉聚楽亭訪物条 沉香百斤方五尺餘の壷ニ紀の糸を以て細を結ひ人ヒて寄て来る 聚楽第行幸記○聖護出湯殿上記日

廿日紀年の之壷院出ル人ヘ沉十斤一信長二信長仲長へ沉一斤つゝ 四湯殿上記

文永二年十月　大閤九条殿四九条殿物語ニ曰　二服二十沉香ノ丸タ三ツ云々
　　時賢卿記

蒙長四年五月　拾典侍参奉の後為四条殿の御所へ沉二十両参　内侍殿上記
同五年十二月　注給へ小の御所へ沉二十両参　同
文永五年三月　蒙長十二年三月　沉香タ五種也　孝亮記
　　蒙長十二年三月　秀郷ヨリ　ひとつハ沒後ニ中さだて　山科ニ市ニ
　　の如ク　秀郷ヨリ　沉のほそ紙ニ百両参
同十三年四月　秀郷ヨリ　今朝の煩如度ニて　参ニ　とて　ツ　ニ市ニ上
　　ちゝ、　秀郷ハ　寰ヨリ　沉百両　参上
後水尾天皇寛永三年九月　紀章卿記　寛永二年　沉香の　榴　ハ　二百ヨリ中四ツ
　　四尺五寸ヨリ　大ハ　ハ　ヨリ　伽羅二十斤　ヨリ　の　ニ入中　一尺ニ寸　ハ
　　二尺　ニ　一尺五寸ヨリ　寛永二　紀章記　○　丑霧叢日

霊元天皇寛文十二年六月　禁裏ヘ沉香進セラル　丑霧叢
孝明天皇安政五年二月　堀田備中守参内　ヨリ　タ　五千枚　金
沉風鳳香呂一箱　沉香　ニ　歌上　言成卿記

贈沉香

後一條天皇治安三年七月　高田牧司妙忠別進苔一合　納沉
香五十両　衣香十両　丁子三両　ニ　小右記
万寿三年八月　名香　沉香　丁子　白檀　各一両　雑香二升　一合　納一升　供料
用紙廿一帖　奉大僧正　南許　為如　祈願　随彼命　奉　也　日
後小松天皇　應永十年十月　為北山殿　修法舎殿　南布施　人別　鵝眼百疋
小袖一重　沉三両　被裏　被下之　薄様　希代之大善欲　兼敦卿記
後柏原天皇　永正七年五月　陶三郎　来沉香二切　惠ニ　実隆ニ
　　記

大永五年十二月入夜向前左府明後日息女被参武家其事
賀申之一荷両種摺之香罍納沉麝之被自愛之実隆ノ記
後奈良天皇享禄二年正月大内左京大夫有手状沉香 ホ一
九両 納莒送之ヲ
ヲ年四月宗牧来沉香一炷麝之ヲ
ヲ年六月杉原十帖沉香一両遣不孤了ヲ
ヲ年十一月沉香一切進内相府ヲ
ヲ四年正月武野新五郎沉香持来ヲ
ヲ年七月摂西院明後日ヲ令下向越前為暇請入来沉香山形
一罍餞送了ヲ
後陽成天皇天正十八年九月 毛利輝元招請 沉香一壺紅の
細を掛 時実ノ記 関白秀吉ノ儀

天正十九年三月紫竹宗孝来沉香十両 従孝義ヲ給 時実ノ記
後陽成天皇慶長十九年四月千助ノ呼沉香ノ感得十二月一
分也代廿四匁五分也 時実ノ記
寛永六年七月堺ノ香昊賣彭右来門来沉香一斤土蜜也ヲ

宋人贈沉香

後一條天皇長元二年三月宋人贈書函條云 進上」沉香五
両云々右件土宜誠雖陋尠為備義礼乖進上如件 万寿五年
十二月十五日宋人周文裔傳日」 進上右相府殿下 小右記

輸入沉香

後花園天皇永享三年八月自仙洞勅書被下自琉球国到来

沉香一二俵市用可申沙汰云々　清濟准后記

十月自猫攻国沉俵一十八斤代千八百疋自室町殿召給了　日

後水尾天皇慶長十九年七月薩摩太守忠恒ノ船来也

申口　時夢卿記

中御門天皇享保八年薩摩長崎入津占城廿一艘沉香千百廿

斤　月堂見聞集

同十八年二月日　形沉香百斤　日

有名迦羅

初音　蘭　白菊　芝船

初音　遠江守蘭　備前白菊　細川芝船　仙臺　四品同木也

細川三斎長崎表呉国船入津の打物を彼地へ京業を業し孫

蓋を求めさせらるひと事無沙汰五左衛門と云て役一人海て

差越多く所々呉服物仏種の方法を求て元本と来本と二つあり

三比松平陸奥守忠宗より也庭物を調へん為役人を乗せ彼

仏種の本と来本を世ら合ひて二本の役人と互て所々にて世奥

津の調へ来りし仏種に数ひ有き名香にて二本特に秘蔵を遂

給を初音と名付らるを也　明暦元年の比いつれ初音の

仏地にて枯る　廿五歳ある時分定而三年西京九月六日二條の家

地へ　主上後水尾帝　紅葉の事有り廿四時肥後守将忠利之妻婦へ彼名

香を出給ふ則是を献上きる　主上感賞ありて白菊と名

付給ふ　「こゝ」と云の白菊の花

廿歳の仏にて又仏蓋中物を西宮の役人本来を調へ来りしを大

殘念ゝ思ひ出すより名香を焚き常に是を愛して薬餌と為
さらる「世の中はうきもの」なれ
らん　此歌の心なるべし　玉名ゝ
らめ人ゝ白菊初雪葉新を只日し香とのみ笑へ或は小城產物
の不称のごとし名を呉竹とよぶ人多し皆誤り也　翁草。嬉聚名物考曰
三種名香歌　藤孝　後水尾院御製　嬉聚名物考
或人初雪と云ふ仏説を信じの歌として付ける名なり　此仏説
只いはゆる歌詠ゝ者かゝる仏説を付ける「夢
ゝ」取ゝし以ての部分を云ふ　品の部分なり　ト泰和歌集

黄鶯

迫は長崎にて事次第高価なる物にて本目四貫目
り稲葉兵衛殿の家に納む花名舟古物を取て名付たれい英

鶯と名付ら迄ゝ甘き仏説し　嬉聚名物考

蓮葉

蓮葉　後西院勅名　大坂住　吉左馬丞持　嬉聚名物考　吉左衛門号泉屋と

大聖寺仏説

加賀大納言英系列書の家に山田嘉六と云ふ小性有り鄙の
事なれども勇猛なる者にて信仏心の篤き者の死の時日蓮大
聖寺に軍の時に此者を必討死せんと云ふ遺言
しして送り出す仏説所にて跡しして今に到て是を大聖寺仏説
と名付て彼家の人敬ひ世に笑くもの多し　口

伊達氏伽羅

仏説の事は宝山あるを仏壇極の事と越ます如し大なる宝
の形のごとく切るる仏説いと多し和の事を皆紹の者合るして

本と金にて拵へる香合なりと云ふ　淳海

伽羅獨鈷

山城国葛野郡大覚寺門跡付器

伽羅観音像

東山天皇嬪市寄附ニシテ山城国葛野郡妙心寺中玉凰院付器

伽羅油

西保茅安の北京宮所縁の久吉貴たしむ長三寸の市字

賀縄手の五十嵐景を製を沼尻ゑを芝の大妙菴脊出赤

右寺門寺と始めし玉以前を切麻の沖ゑ白檀丁ゑ等を浸し

て白い沖と称を　本朝世事綜綱

歌伽羅

後水尾天皇寛永三年九月行幸右大臣家光邸の第ゑ入中一尺六寸長二尺高壹尺五寸あり　伽羅二十斤白　二條行幸記。古湯殿上記日

霊元天皇寛文八年十二月女院市子より伽羅古皇ノ由ヲ

仰進セラルヽニ付テ伽羅十種ニハ自筆ノ古書ヲ添テ進セラ

ル　玉露叢

日九年六月本院市子へ金子千両并ニ伽羅一本進セラル日

日年十月禁裏へ古書物色ゑ并伽羅二本進セラル日

日十二年六月禁裏へ古伽羅本院市子へ古伽羅宿次ヲ以テ進

セラル日

日年十二月法皇市子へ古伽羅一本老物十老ヲ進セラル日

日十三年五月女院市子へ宿次ヲ以テ古伽羅二本古硯箱古屏風

二双進セラル　五霜叢

延宝六年五月法皇ヨリ御へ御硯二面巻物二十ヲ如院ヨリ御へ金一分一万切御硯二面ヲ至上ヲリ　日

同年六月如院市不例ヲ上使稲葉美濃守上系進献如院ヨリ御へ御硯二面ヲ法皇ヨリ　法示日記

同九年八月戸田越前守上系参内ヲ方ヲ多献御硯一面　初名入雲

越前守自分献上　彰院御硯一面ヲ　日

中御門天皇享保十七年四月参内密ヲ附重豊朝臣献名香先日以此朝臣内ヲ献分依被仰下也　雖波津　橋立　仁義

右之種以青檀紙包ヲ載白木台則献上　五月京豊朝臣参

陪宮参内ヲ被仰綸言ヲ先日所献之桂香古代木　珠徐思

合也依之雖彰感香賜之ヲ　香賜教子　賜御硯条　光業公記

桜町天皇元文元年十月参院　中御門　献名香両種花淵春風依先日

被仰下也　日

中御門天皇享保六年七月松平伊賀守参内　将軍　吉宗　家分禁裏

へ献上物御硯一箱　月堂見聞集

東山天皇元禄十五年四月　三尤飯住ノ礼　留主分献物　禁裏院中へ御硯一

面　日

賜伽羅

中御門天皇享保十七年五月重豊胡昆来臨對面愛内〻被
綸言云先日所歎三種香古代本朝珍思食也依之雖彩渡香
賜之〻恐懼畏頂戴披之三種以書黄赤紙包〻詔女房筆也
治民山路菊万家春三包一包以白紙唐紙被包〻不堪感荷
抃躍畏存由宜被沙汰弥中〻朝昆語云治民法皇市詔山
路菊東山院市詔万家春今上市詔也 光業卿記
桜町天皇元文元年十月依當番泰院中御門及菖〻綾小路侍従有美
被仰出香歎上目出思食也仍賜此一枝〻謹奉受〻召楓枝
以白紙捻結付屋紙此紙中有貝以召紙法口貝中有市香両種山
路菊八千代畏存也中謝〻口
孝明天皇弘化三年三月今日奉為仁孝天皇市中院中拜香
西寺泰清市焼香伽羅奴女納言為拜領用盤障名香也 糖世記
十月殿下(改通)与年在職殊春家勅旨被慰〻 勅詔伽羅木一名迦絡
三十七以新大仏言先賜〻 実久卿記
今上天皇嘉永三年二月(光幸院条)今日市焼香伽羅奴女納言為拜領
俗恒例の格用〻也

賜伽羅

後陽成天皇慶長七年十二月伏見へ越内府(宮内卿)へ市礼市上洛津
又八京礼進物伽羅沉一斤進上之 梵舜記
後土御門天皇文明六年二月今日宮内卿方ヨリ香二色送賜
歌アリ此 「ちるもあるの梅本はひとりきゝかたらきゝ燈
なるゝ」 市返事此 「梅本はくるるまはふるさとの

海の旅人 言国記

後柏原天皇大永五年閏十二月十八日堺阿弥陀寺伽羅真南蛮
等被送之幸運房持来 廿四日彭大納言伽羅一煙送之 実隆公記

後陽成天皇慶長四年三月冨田左近方へ伽羅ト赤ノカシ等書
七年四月伽羅五両清津殿庫入道 快之所 以上信尹公記

中御門天皇享保十七年正月 名香一種 蓬洲送与頭中将実
全朝臣許依懇望也 光栄公記

外蕃獻奇南香

後陽成天皇慶長十一年九月賜書於暹羅国王及占城王求
奇楠香二国尋入貢 野史引往来日記

同十四年先是我高舶相継至阿媽港東照公命長谷川廣智
令致占城奇楠香有馬晴信傳聞之以所畜香木献之公特賞
之曰肥州者當占城之衝路遣人應求香木也廼附与白金甲
冑屏風等於晴信 野史引東遷墓業逸史

同十八年五月安南大都統上書獻奇南香 野史云通書引日記

輸入伽羅

中御門天皇享保八年當年長崎入津占城廿一艘 伽羅九
十六匁 月堂見聞集

蘭奢待 或云黄熟香

紅沉香

右二材今在正倉院寶庫俱是聖武天皇市遺香也蘭奢待長五尺一寸四分二寸八分又在長一尺小片以今秤量之重三貫五百目也紅沉香一材長一尺一寸五分四三尺二寸五分徑九寸五分又在三片小材以今秤量之重四貫七百五十目也實希世之重宝也亟之者法隆寺所藏沉水香也明治十年二月車駕臨市于宝庫覧於宝器令截黄熟香供市料云

截蘭奢待

後花園天皇寛正六年九月宝叶殿義政春日社参詣於當寺宝物市覧両種市香被召上之〻截一寸四角方宛二個喜一歟禁裏其一歟將軍又截五分四方一個歟別當之〻三倉市聞封日記

参照 諸海進台記云同日義教春日社參詣條西室へ渡御於
彼所宝蔵霊宝等出拜見之〻沉二切 二寸許 日被召之了至
德時モ如此免何様被任先規了
正親町天皇天正二年三月織田信長有經望宝物拜見被截
菊奢待紅沉香者不截之 三倉内開封目記○熊千の記 武徳安民記 引草庵漫筆等謂家康截菊奢待者妄説也
欽菊奢待
後土御門天皇延德二年正月 西室僧正菊奢待一切令進上
先日御所望之由予傳仰者也 実隆公記
賜菊奢待
後水尾天皇寛永五年十月薩摩中納言參自禁中菊奢待香
ヲ申出遣中納言 信尋公記

白檀香

本草或抄云出波律国或抄云旃檀樹也出越州
西域記第十云秣羅矩吒国南濱海有秣剌耶山崇崖峻嶺洞
谷深澗其中則有白檀香樹旃檀你婆樹々類白楊不可以別
唯於盛夏登高遠瞩其有大蛇蟠者於是知之由其木性凉冷
故蛇盤踞既望見以射箭為記冬蟄之後方乃採伐 香字抄○宝香藥等抄 抄類聚名物考並同
疏第八云白檀香西方名摩囉庾是山名即智論所云除摩梨
山更無出旃檀處也 東云十一面経疏云沙鑠迦像者是木
名謂檀木之名此云堅固木也故上文云堅好無隙白檀也 宝香藥等抄
本艸云檀香時珍曰釈氏呼為旃檀又曰樹葉皆荔枝ニ似タ

リ皮青色而滑澤ナリ黄白紫アリ白檀尤良シ白檀ヲ久ク貯ルニハ紙ヲ以テ封シ包テ収ムレハ不泄氣トイヘリ紫檀ハ用ヒテ器材トス藥ニ用ル事稀也白檀ハ藥ニ用ユ本艸ニ紫檀新者色紅旧者色紫ナリ黄檀モ最香俱ニ可作帯鞓扇骨等物トイヘリ然ラハ黄檀モ紫檀ト一類ナルヘシ釋氏ノ赤旃檀トイヘルハ紫檀ナルヘシ今日本ニ紫檀トヽ樹アリ其葉ハ粗本艸ニヽルカ如シアツクシテ四時不凋荔枝樹ノ異國ヨリ渡リシヲ見シニヨク似タリ其花方一寸許六七葉ニワカル白色花ノ心ハ紫ナリ皮青色ナル事モ本艸ニヽカ如シ大和本草

白檀のよきハ木氣あらてなのまぬをよしとゝひ檜の木の色なりもの悪し 後伏見院薫物方

白檀佛像

勝尾寺講堂觀自在像者寶亀八年堂成九年九月日州沙門興日語座主開成曰傳聞講堂已成未有像我有八尺白檀香木願捨為像材成乃遣比丘豊南赴西海迎之十一年七月十五日比丘妙觀者来曰我能刻像得否成許諾三日後僧俗童輩惣十八人伴觀来雕像千臂千目莊嚴端嚴 元亨釈書

宇多天皇寛平二年四月 内裏 東寺 仏像 仰梵釋寺僧神恵彫造白檀四天王像 扶桑畧記 高僧傳 同

同四年十二月為諸公主奉為中宮修功德願文云中宮殿下毎年臘月勅三日夜讀経礼佛便結構佛殿刹那安置宝像白銀梵釈天白檀像四天王 菅家文草

同五年十一月為茅一公主賀四十齢願文云奉造白檀釈迦

佛像一軀脇侍菩薩二軀右中宮殿下為第一公主所莊嚴也
公主春秋四十事須慶賀優遊日
醍醐天皇延長八年七月於延暦寺被造始白檀五大尊高五
寸依天皇市藥也 扶桑畧記
自筆法華經願文 前中書王 第子敬白〻謹而奉造白檀
觀世音菩薩一枉釈提桓因毗沙門〻 貞元〻年九月十九
日第子左大臣皇太子傳源朝臣 胡蝶辯載
一條天皇正暦二年閏二月 回鶻天皇市中院条 奉造白檀阿弥陀佛像
觀音勢至菩薩像各一躰 扶桑畧記
同五年五月 臨時仁王會条 安置白檀三尊 市齋會市佛也 本朝世紀
長德三年十月 東三条女院 造白檀釈迦如来阿弥陀如来先考先妣
亡兄第三人 為〻成菩提自今日限五〻日被修講演〻 小右記
同年三月太皇大后宮於上東門宮被修如八講之儀讀経〻
安置白檀阿弥陀佛觀音以大 小右記
長保四年七月 大僧正觀修供養 解脫寺条 奉造白檀阿弥陀佛像一躰
觀音勢至二菩薩像各一躰 扶桑畧記
同年八月 奉為故東三條院 被修八講条 白檀佛三躰高一尺以下弥陀普
賢文殊各一躰佛師僧康高 本朝世紀
後一條天皇寛仁三年十月己時奉造塔内釈迦多宝二躰尊
像 三寸以白檀奉造也其上可押金先日仰四聖之後造栴木 下押金者仍以白檀所奉造也佛師塔空 小右記
万壽四年十月奉為皇太后宮初七日被修佛事條奉造等身
五大尊白檀普賢 四寸 小右記
長元〻年十一月今日故入道前大相府周忌法事於法成寺
阿弥陀堂被修〻〻白檀阿弥陀觀音勢士 有佛殿 日

同年十二月参閲白殿被定奉為故殿可被彫市八講経事 昭年

同二月 白檀釈迦普賢文殊等彫了被調之由有定 小右記

後朱雀天皇長暦四年十月注進仁壽殿市佛條云白檀正觀

音像一躰高七寸 西院八結

後冷泉天皇永承七年八月廿日 殿講説 安置佛経五寸許白

檀普賢一躰安蒔絵机上 春記

治暦元年九月 以家奉為先帝被造作法華経 供養市筆金字法華経并白檀

釈迦三尊 扶桑略記

同二年 中宮章子二條殿 白檀の古佛之尺許なる 阿弥

陀の三尊なり 栄花物語

白河天皇義暦四年二月子終此方焼亡高倉殿也寝殿市

物一不取出此中白檀古佛不取出之事誠以遺恨也 小右記

同年三月申時令佛師造始白檀地蔵像之寸 日

同年五月自侍従之任之許白檀一切経幸相奉造佛料令取

也 日

同月自戒信法師許新白檀一切造佛料一日令示給也 日

堀川天皇寛治五年十一月 殿下御願 少僧都覚仁奉造佛殿 市佛新造 中文殊

右 普賢 左 白檀佛也 後二条関白記

康和五年正月 奉為新延命寺 被造佛殿条 白檀善賢延命 中右記

同年十月今日佛像一躰不完器案一躰愛染王五寸許也

本白檀 殿原

鳥羽天皇永久五年十二月以白檀金剛童子五寸許始作之

殿原

天永三年九月奉中宮為代帝方佛事白檀尺迦佛造之

产星寺者故陽明門院所發願也 中右記

崇德天皇大治四年正月 白河上皇出佛 白檀菩薩王并等身

門市佛等 长秋記

同年八月 白河上皇令院覽白檀善賢袈裟上著淨衣夾右右

遣佛像參

最脫右面鉞三鋸三 同

同年九月 鳥羽上皇於白川殿中央向安置白檀三尺善賢像

院宮遣之方 中右記 結緣院供養參

天皇佛懺

近衛天皇久安二年十月 美福門院被供八講 白檀等身釋迦佛一佛 中右記

世紀

後白河天皇保元三年正月市女笠姬也高市屋中央安小堂

安置佛殿子一臺 白檀小佛之佛太日如來為中尊往代古佛

焼失了後之象院之時被寄造此佛 人車記

京倉天皇嘉應二年礼拜持寺吳山舊中納言遣之市堂安置

白檀三尺余觀音像 人車記

安德天皇治承四年十二月奉供養白檀千手觀音性阿為導

師 山槐記

同月彩院之食方山佛供養藥師白檀三尺 同

後鳥羽天皇建久五年七月奉作白檀菩薩王小像中宮市移

也 玉海

土御門天皇建仁二年十月 樹殿臺通佛經供養 佛白檀一尺六寸善賢

像一體佛師法眼運慶奉造之 仲白檀小菩提 師賢 大殿此時白檀

也 猪隈閣白記

第元四年九月仲臺入道与白檀造菩薩王一体殊施之 玲之

玉葉

後小松天皇應永三十二年四月後円融天皇三十三回聖忌

讽誦文三千三十三廻之忍辰講十如十界之妙理奉供養白
檀歡迦如来像一體并善賢文殊等像各一體（後田殿院之十三回忌日讽誦
文）

後花園天皇永享四年六月廿五日造白檀今日造
立開眼供養等（宮内庁所記）

後土御門天皇延徳二年四月（嘉元門院之四十忌 後鑑中八講条）庭中央の間
の東西に三尊の歡迎の像を展へられ是古き世の古典
等の本尊として白檀木にて作造る一樣手半の尊像（延徳中八講記）
南阿弥陀堂 白檀観音像一枚高一尺（東大寺要録）
一條天皇寛弘五年七月以白檀奉令作薬師前信都明救阿
闍梨尋叡等奉仕官市陸吾（市堂関白記）
後一條天皇寛仁二年五月以心叡前信都供養白檀阿弥陀
佛 ㄇ

白檀枕

畫竜甲枕壹（裏白檀）右一色平城宮市守天皇以天平二年歳
次庚午七月十七日納賜者（大安寺資財帳）

白檀念珠

近衛天皇仁安元年九月（故関白基実中陰布施）白檀念珠並眼枝（人車記）
ㄇ二年三月（ㄇ月忌条）布施如例自迎来殿方樺物移扇上後
ㄇ
金念珠（裏漆の木蓮子 沉白檀五文字）

白檀経函

聖武天皇市代山背国相楽郡方發願人姓名未詳也為報四
恩奉写法花経為納大象遣使四方求白檀紫檀乃得諸衆京
以銭百貫而買喚工巧人規令造函以奉納経（霊異記）

麝香

新修本草云出中臺川谷及益州雍州山中春分取之生者益良注云陶隱居云麝形似麞恒食柏葉又噉蛇五月得香往々有蛇皮骨故麝香療蛇毒今以蛇蛻皮裹之故麝香弥香則是相使也其香正在麝陰莖前皮内別有膜裹之今出隨郡義陽晉地諸蠻中者亞之今出其臭員如栗狀人見云是卵不然香多被破雜蠻中猺差於益州出益州者形扁仍以皮膜裹之一子真香者分臻汝故作三四子刮取其血膜雜之以餘物大都亦有精麁破者有一片許毛芥在裹中者為勝彼人以為誌若於諸羌夷中得者多真好燒當門沸起良久即亦好今唯得活者自看取之必當全真耳生香人云是其精溺凝作之殊不尓麝夏月食蛇虫多至寒香滿入春患急痛自以脚別出之著矢

溺中覆之皆有常處人有遇得乃至一斗五升也

秘異記注云麝知身隱棲高阿深谷畏猛獸陷斃水淵歷歲不烟山夫議窺探斯用腹臍心涌流在脾頭則汲拾盛取器曝微景經浹辰裂縮如凝擣末裹胡帛其香越山川聞數十里于時或称之水麝或号之心結　炮炙論云麝香多有偽者不如不用其香有三等一者名遺香是麝子臍間滿其麝自於石上用蹄尖剔臍落者落處一里草木不生並焦黃人若收得此香價与明珠同也二名脎香探得甚堪用三名心結香被大獸驚心破了因茲狂走雜諸群中遂乱投水被人收得擘破見心心流在脾上結作一大乾血塊可隔山澗早聞之香是香中之次也以上香字抄。薰集類抄曰

牟利曷陀羅經云麝齊香寂勝王經云麝香莫訶婆伽音義云麝香神夜叉音石形如小麝齊有香也孔雀經音義云莫訶婆伽此云麝香宝香藥等抄

和麝香法

薰物方口傳生師口傳曰若濕臭者炙搗之亦以真麝一臍和作四五臍是為好而近代麝合作数臍其香甚芳亦酷烈之麝多不集納一器若集納則燒失香氣云云若經年香歇則以虵蛻纏納麝之囊若纏麝臍拂地置麝以瓷器覆其上以炭火置器上經食頃取出或雖不纏虵蛻理如煎法且好或秘方云堀池深一乳境許以火燒之赤如紅深拂後以隔宿小便三合許灌之穴以香置之以土器覆之冷後取之經一合頃真以麻子淨洗覆之香字抄

麝香辟惡夢

以真香一子置頸間枕之辟悪夢 香字抄

麝香辟蟲毒

崇徳天皇保延元年七月上皇螟蚘被噉帝童患中可令付麝香 長秋記

服麝香

堀河天皇康和五年二月今日今宮(鳥羽)令服麝香給也従内被奉也典薬頭忠康朝臣勘申云小児令服麝香給有二様付乳令服又和密令服云云雖然付近代説令服帝口給也 殿暦

樂器入麝香

麝香丁子各花梨木甲已上基綱於鎮西作之此二琵琶各腹中入麝香丁子等令薫 胡琴教録

今ノ笙ハ十七管アリ此中ニ也ノ竹ニハ麝香ヲ入ル是ハ息ノ穢氣ヲ去ル為メ也ト夜鶴庭訓抄ニ出ツ秘傳也 東説紀聞

麝香俑

亀山天皇文永八年正月新院(後深草)ニ帝方ヨリ内の事しめす白金の形ニ麝香の瞬まて蓑きまる男(ゆ)いざ事こそ(同)都鳥ちど振くいと所(ゆ)まめのしくおのしくきまる(丁癸) 皆説

麝香和琴柱

土御門天皇建久九年二月八幡宮幸馬場殿中所陳列品像以薄様畏麝香為和琴筆柱(各五云云)以神領之乃貢備王者之獻物不可然事欤 三長記

傳麝香

後深草天皇建長三年三月(同鶴各)赤小黒ちとふ鳥ちとふ兼てう伏籠ニつきて各形て丁子麝香ちう附境物ちとして仏の

白ひ麝しきとて爭ひし　弁内侍日記

湯入麝香

後鳥羽天皇建久六年八月　中宮市屋市湯殿　入麝内一袋納七寶麝香　三長記

鳥羽天皇元永二年十月二位殿出立給時下麝香為擯水沓令薫是為用意也　長秋記

麝香奪紅

麝香を沓に汗臭　大和尚書を瑞人に夏月麝香を沓の臭ヒヲ去ルヘシ

紅花沉香麝香を忍む紅深の衣に沉麝の香移り又香裏かとを納むるを色変を　大和本草　○新古今風土記日

佛前不焚麝香

佛前に麝香を焚き誠あり　摸真実経に又〻〻〻金光明経の奉

天昌の法香の中に麝香佛に焚き供さるべし　塩尻

盗麝香

三條天皇長和三年二月十日夜丁子金香麝香等所出八者石麝香紛失〻〻廿瞬〻〻　十八日小舎人秋成盗麝香其物出来六瞬納尿菩埋古東宮依秋成申堀出其遣是近江国使官人随身〻〻地白状者　小右記

献麝香

白河天皇義房三年勅封蔵麝香五両進官其代銀提一口施入百五十両　東大寺要録

鳥羽天皇元永二年十一月自宮（勅仁親王）依召進麝香丁子等　長秋記

後円融天皇應暦二年二月（検大納言義懐）献物帳　市服五十重古剱

康綱以下〻小神〻外麝香瞬二〻　後深心院関白記

西園寺天皇天正七年八月大典侍殿より さうゝ丸 此陽殿上記
後水尾天皇寛永三年九月 紀幸右大臣宣之二条家記物条 将軍様より麝香五分
沈の大香五つ入 大内西様より麝香五分白沈の大香五つ入
二條紀幸記 玉露叢日
後堀川天皇寛喜二年十二月 仁和寺家薩摩上皇御幸の時物条 錦埋木櫛 注銘
薄砂金以西蕃報恩麝香二十為火 明月記
三條天皇長和四年九月 太宰帥年料貢物條 唐皮ゝ瓶一荷紬絹ゝ
香麝香十瞬 小右記
正親町天皇天正九年十一月 大典侍殿より 奩二十目麝香一分蓋
陸五目丁子五目 此陽殿上記
後陽成天皇天正十六年四月 紀幸右大臣宣之二条家記物条 院御へ麝香の瞬
三つ 大政所より麝香の瞬十 御所より麝香の瞬十年 十八
日 今日も関白より麝香の瞬二十年 日
霊元天皇寛文十二年六月 禁裏へ麝香 中院殿御へ麝香ヲ進セラ
ル 玉露叢
後花園天皇永享七年四月 宮内義賀記四 麝香瞬 卅 堆紅皇帝
香閣小記

賜麝香

三条天皇長和二年二月以麝香賜文殿皇長年五条 金玉ヲ百目麝香五瞬目松之片許 明月記
崇徳天皇長承三年二月 紀略後中年条 上皇ハ御行仰ヲ麝香一
薫物一裏ニ賜別当者御紀承 長秋記
四年十月 女院ハ殿経信卿ハ入薫香麝香給者 日
後土御門天皇延徳元年八月 武田ゝ麝香の瞬 ゝ 此陽殿上記
後四条天皇康元二年正月 女房いとの典侍殿より典侍殿へ
内侍右近内侍弁内侍新内侍 右馬内侍 左馬内侍 佐渡内侍 加賀の局 今参

[illegible]

[illegible]

後水尾天皇寛永廿一年二月麝香一斤[illegible]

右[illegible]

武昌とゝ[illegible]人の[illegible]

[illegible]

の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

宋人獻麝香

後一條天皇長元二年三月附牧司妙忠使大宋国台州高客周文商送書其書云」　大宋国台州高客周文商誠惶誠恐頓首謹言」　言上案内事」　右文商以去万寿三年七月辞　聖朝帰本国復以今秋九月叅来是即仰徳化之無涯慕忠節之有終也抑従弱冠及今衰邁伏聞　殿下徳聲政誉甚来久矣然而貴賤有殊達名無路雖有奉仕之願未顕犬馬之効蓋恐聲威之貴徒送多迴之春秋也已往之咎追悔何益但於此度欲遂旧望仍特写寸誠叅聞　高聽伏垂昆造明鑒還衆以所進之表章乞達　関白相府次奏　天聽然後早申下　勅使検領貨物是　国家念久叅之勤異俗感老来之幸也不宣文商誠惶誠恐頓首謹言」　万寿五年十二月十五日高客周文

裔傳旦」　進上右相府殿下」　進上翠紋花錦壹疋小紋綵殊
錦壹疋」大紋白綾三疋麝香弐臍」丁香五拾兩沉香五兩」薑淫
香弐拾兩珂梨勒拾兩」石金青三拾兩光明朱砂伍兩」色〻紙
紙弐佰帖糸鞋參足」　右件土宜誠雖陋尠為備義礼所進上
如件」　万壽五年十二月十五日宋人周文裔傳旦」　進上右
相府殿下　小右記

高麗国獻麝香

高麗国禮賓省牒　大日本國太宰府　當省伏奉聖旨訪問
貴国有能理療風疾醫人今因高客王則貞回帰故鄉因便通
牒及於王則貞處說示風疾縁由請彼處選擇上等醫人於来
年早春發送到来理療風疾若切効它不輕酬者今先送花錦
及大綾中綾各一十段麝香一十臍分附王則貞賫持將去知
太宰府官員處旦元信儀到可收領者牒具如前當省所奉聖
旨倫錄在前請　貴府若有端的能療風疾好醫人許容發送
前来仍收領足段麝香者謹牒」　已未年十一月日牒」　少鄉林
既木」　鄉蒼」　鄉鄭」
日本国大宰府牒高麗国礼賓省」　却廻方物等事」　牒得彼
省牒偖當省伏奉聖旨仍收領足段麝香者如牒者貴国犯雨
露於燕寢之中求醫療於鼇波之外望風懷想能不依〻卿牒
狀之詞頗聚故事改處分而曰聖旨非蕃王可称宅遐陬而跨
上邦誠彝倫迨覈況亦託商人之旅艇寄殊俗之單書執圭之
使不至封函之礼既虧双魚猶難達鳳池之月扁鵲何得入雞
林之雲允厥方物皆從却廻今以狀牒之到准狀故牒」　兼暦
四年月日　朝野群載○大日本史同

白川天皇兼暦四年閏八月宋朝高容孫忠持參錦綺可被納
欲若被納者可有答信物欲〻錦綺麝香可被留否之事議定
可候也者 仲記

附録

欽生麝

兼安元年七月入道大相國進羊五頭麝一頭於院 百練抄
慶長元年是歳西洋高船遇風漂至土佐葛城浦舟人多溺
没存者廿矣守護長曽我部元親以聞秀吉乃遣増田長盛
点検之藉没其載獲錦綺十万端中畧 生麝十頭生猿十五頭
卵子金千五百箇鶏鴨二翼秀吉以奉之 禁闕余頒予云
卿列候 野史引家譜元親記

鬱金香

開寶重定神農本草註云生蜀地及西戎苗似薑黄花白質紅
末秋出莖心無實根黄赤取四畔子根去皮火乾之馬藥用之
胡人謂之馬遂嶺南者有實似小豆蔻不堪噉之又有青鬱金
黄鬱金又有熟鬱金者其中有以五種香等造之 香字抄。薫集類抄引
道麟記云鬱金者是樹名出罽賓國其花叢取花安置一處待
爛壓取汁以物和之為香花稲猶有香氣亦用為香也 香字抄
廣聚陀羅尼経云共矩麼 鬱金香是也 最勝王経云樞云鬱金者草
花之名或抄云甘樹花亦云鬱金香阿羅訶経云佛在羅閲國
有大樹名鬱金〻〻皆此子緑紺青黄白紅七種光色室如二
升瓶其味甘喫之美花色除病死以壽終不逢横 宝香薬等抄
蔵器曰鬱金香生大秦國二月三月有花狀如紅藍四月五月

采花即香也 本草綱目

時珍曰按鄭玄云鬱草似蘭楊孚南州異物志云鬱金出罽賓国人種之先以供佛數日萎然後取之色正黃与芙蓉花畏嫩蓮者相似可以香酒 同

唐書云太宗時伽毘國獻鬱金香葉似麥門冬九月花開狀似芙蓉其色紫碧香聞數十步花而不實欲種者取根 同

鬱金 [illegible]

[illegible]

鬱金香

昭鬱金香

三條天皇長和二年七月廿日大宰府使府生若倭部亮範來藏規朝臣付亮範進唐物 荒鬱金香十斤 廿六日以範朝臣付勝署 左右樓ナリ 進唐物等 荒鬱金香三兩 小右記

安息香

出西戎似松脂黄黑色為塊新者亦柔韌（音刃）以油紙裹之納但入漆器良（香字抄）

本草稽疑云安息香堅於石蜜者薰之安悉香是今安息香彙耳（香字抄。董集類抄同）

集經云永〻羅香唐云安悉香最勝正經云安息香宴具擢音義云永〻羅香此譯安息香也千手合藥經云拙具羅香者安悉香是也宝樓閣經中云乾陁羅樹安息香也或抄云安息香者烏爪實也（宝香藥手抄）

時珍曰此香辟惡安息諸邪故名或云安息国名也（本草綱目）

珣曰生南海波斯国樹中脂也狀若麋膠秋月采之（同）

禹錫曰按段成式酉陽雜俎云安息香樹出波斯国呼為辟邪

樹長二三丈皮色黄黑葉有四角經寒不凋二月開花黄色花心微碧不結實刻其樹皮其膠如飴名安息香六七月堅凝乃取之燒之通神辟衆惡 同

明一統志云三佛齊國安息香樹脂其形色類桃瓤不宜於燒而能發衆香人取以和香 又云安南安息香樹如苦楝大而直葉類羊桃而長中心有脂作香 類聚名物考

欽安息香

塘川天皇嘉兼二年閏十月自院家光来云安息香僅八可進仍急進了 殿暦

丁子香

本草云生交廣南香二月八月採今注按廣州送丁香圓樹高丈餘木類桂葉似楝葉花圓細黄色凌冬不凋其子出枝蕊上長三四分紫色中有蘖大如山茱萸者俗呼為母丁香又葉陳藏器本草云丁香於母丁香主變白以生薑汁研拔去白鬚塗孔中即異常黑也 香字抄

炮炙論云丁香有雄雌雄顆小雌顆大似獧棗挾方中多使雌力大故膏煎中用雄若欲使雄須去丁蓋子丁蓋子發人背癰也 香字抄 董集類抄

試丁子法以齒嚙有音辛者是為上好不然者是朽古 董集類抄 香字抄

本草綱目云丁香字彙云日華子言丁香治口氣此正是御史

所含之香也是以謂丁香時珍云雄為丁香雌為雞舌香（宝石類書）
藏器曰鷄舌香與丁香同種花實叢生其中心最大者為雞舌
擊破有順理而解為兩向如雞舌故名乃是母丁香也（本草綱目）
珣曰丁香生東海及崑崙國二月三月花開紫白色至七月方
始成實小者為丁香大者如巴豆為母丁香（同）
本草ニ異名ヲ丁子香ト云故ニ日本ノ俗丁子ト云母丁子
トハ本艸曰有雌雄雄顆小雌顆大如山茱萸名母丁香入藥
最勝本艸原始曰擊破有順理而解為兩向如雞舌又一名雞
舌香藥肆ニ煎シタルカスヲウル事アリエラフベシ久シ
クナリテ香薄キハ酒ニ浸セハ香生ス（大和本草）

丁子去汗

夏日汗多リテ作法ナトスルニ思ハヌ過リノ出来ルナレ
ハ丁子二百粒ト山椒ノ實百粒ヲ袋ニ入テ佩レハ汗ノタ
ラヌ也（浅茅抄○大和本草ニ男子ハ夏月丁香ヲ佩ヒテ汗臭ノ穢シヲ去ルヘシ）

丁子防寒

冬寒クテ龜手センヲ暖カニセンモ丁子數百粒ヲ懐ニシ
テ苦シカラヌヲリ執出テ手ニ持テ香ノ移レハ手コヾ
エヌ也（浅茅抄）

服丁子

栄西昔在唐時從天台山到明州時六月十日也天極熱人皆
氣絶于時店主丁子一升水一升半許久煎二合許与栄西令
服之而言法師遠涉路來汗多流恐發病欲仍令服之也其後
身涼清凉心地弥快矣以知大熱之時涼大寒之時能温也（喫茶養生記　按煎丁子事載于沉香条）

薫丁子拂蚊

夏月丁子ヲ風爐ニカケテ煎スレハ香満室旦蚊ヲシリゾ
ク大和本草

丁子風爐ヨリ丁子十粒ヲ入至夕終日香氣絶る事なし多
く入過ぎに元こまるて又香氣の悪事なし風爐の湯かく事
ハ〳〵ゆるてゆるさなへし夏ゆゑ夜ゆゑ多くへ〳〵さるべし 津海

佛供丁子

三條天皇寛弘九年五月 皇太后宮奉者 先帝修法令条 市捧物金百兩丁子
丶兩各入瑠璃壺又沉香薫芳也是等 市屢分物也 市堂関白記

欽丁子

四月 奈皇太后宮 藤子 宮に大貳許奉丁子薫芳等 市堂関白記
長和二年二月 以唐物解文啓 皇太后宮条 余給丁子百兩麝香五麝甘松三
片許 日

四月四年九月 大宰帥年料 唐皮ニ籠一荷ニ上答内納種ニ香
丁子百餘兩ニ 藤右相府 道長 欽 小右記

後一條天皇万寿四年十二月 肥前守貴重所進雜物薫香二
喉 丁子十斤ニ 小右記

鳥羽天皇元永二年十一月 自 懐仁 宋 伝 百 進麝香丁子 中右記

後陽成天皇慶長七年八月 丁子二袋 親王方へ進上 信尹公記

四十三年四月 秀頼ヨリ今度の煩市後ニて赤きとて少ハ市心
上せ〳〵ニ 古袋ヨリ丁子百斤 沉百兩 上 如後ハ 八条殿へ 丁
子十斤 沉ヨリ 八条殿ヨリ 丁子ヨリ 西陽殿上記

靈元天皇寛文九年六月 女院ヨリ白麝一壺 丁子一袋 進セラル 玉葉

東山天皇元禄十五年四月三老歌切 銀位の礼 仙洞へ金砂丁子壹
相国入 月堂見聞集

贈丁子

後奈良天皇享禄元年十月丁子一斤宛各割分十当巷資
直卿了 実隆公記

同年九月丁子一斤 望日 万六千目 一袋巷橋名院又侍周桂寺山了 ロ

後柏原天皇永正五年十月大内母儀 今小路丁子一函寺〻鮭蔵
〻〻 ロ

後陽成天皇慶長十五年閏二月神祇院へ丁子三寸寺〻 時慶卿記

官丁子

三條天皇寛和元年正月寺夜丁子金書出羽国八省而麝香紛失
〻〻 小右記

宋人献丁香

後一條天皇寛元二年三月宋人送書函条 呉載麝香郭 進上丁香
五挺而 小右記

輸入丁子

中市門天皇享保十四年七月長崎入津阿蘭陀船輸入丁子
一万二千五百九十斤 月堂見聞集

同十五年七月 ロ 丁子七千五百斤 ロ

同十八年七月 ロ 丁子三千三百十六斤 世丁子七十二斤
ロ

雞舌香 本草綱目併丁香

本草云樹葉似栗花如梅花子似棗核此雌樹也雄樹者花開不實採花釀之以成香出崑崙及交愛以南 香字抄

丁子ノ中ニ大丁子ト名テ中ノ脹タルアリ此ヲ世ノ人鷄舌ト云フ 塵袋

口含雞舌香

木村長門守重成生害条口ヨリ鷄舌香ヲ含め 翁草 沉香条 可合考

木香 一名青木香

本草云一名蜜香生永昌山谷此香即是青木香也永昌不復貢今皆從外國舶上來乃云出大秦国今用合香謹案此有二種當以崑崙來者為佳出西湖者不善葉似羊蹄而長大花若菊花其實黄黑殊在亦有之耳 本草云木香一名青木棄之其躰同青木仍不注之和名云祢奈之久佐一名千煉 出兼名苑 一名午年 同前 一名蜜香一名青木香 出陶景注 一名東吉木童子 出丹口決 一名長生 出兼名苑 出塔磨国青木香是也 香字抄

炮炙論云其香是蘆蔓根條左盤旋採得二十九日方硬如朽骨其有蘆頭丁蓋子色青者是木香神也 口

最勝王経云青木矩瑟侘 宝香薬等抄

木香葉ハ皺アリテ鶴虱及牛蒡ニ似テセハク長シ其形ハ

紫苑葉ノ如シ莖ノ高サ数尺黄花ヲ開ク花ハ菊ニ似タリ
本草ニイヘル形状ニ同シ然レトモ日本ノ産ハ性不好不可
用又青木香トモ南木香トモ云馬兜鈴ヲモ青木香ト云本
草ニ見エタリ木香ノ状如枯骨白クメ嚙之即粘齒者佳シ
大和本草

青木香葉ハ山藥ニ似テ末尖レリ實アリ南天燭ノ實ノ大
ノ如ク一房ニ多クミノル毗草木草ノ馬兜鈴ニ大畧似テ
實小ニシテ本草ト不合馬兜鈴ノ實ハ大棗ノ如トイヘリ
毗草根ハ木香ニ似タリ倭方ニ青木香トアルニハコレヲ
用ユヘシ真ノ青木香ニ非ス国俗昔ヨリコレヲ青木香ト
云醫方ニ青木香ト云ハ木香也土青木香ト云ハ馬兜鈴ナ
リ大和本草

年料別貢

諸国年料供進　青木香二百七十斤尾張一百六十斤相模八十斤美濃卅斤
延喜内蔵式ノ延喜民部式香字抄并日

諸国進年料雑藥　青木香伊勢国十八斤下総国一斤八両
常陸国三十斤近江国十六斤上野国十斤下野国廿斤播磨
国二斤延喜典藥式ノ香字抄日

市修法焚香

正月最勝王経斎會香三斤淺香七両薫陸香七両青木香二
斤二両奏請内蔵寮延喜図書式

正月太元市修法所請雑香青木香十両西宮記

九月季市讀経蔵人召左右近舎人一人於所令春雑香荅陵
青木渡官行事同

焚香祈神

三月 潔齋淺香小一兩薰陸小四兩青木香小一兩 延喜中宮式

門繫青木香

近衛天皇仁平二年五月今日浴中称大物忌大夜用其門戸懸青木香囚巷袂言云今日疫鬼可遊行為免其難有此事云 本朝世紀

獻青木香

土佐門天皇義元元年八月唐青木香有召仍進之 猪隈関白記

龍腦香

本草云龍腦香及膏香出波律國樹形似杉木腦形似白松脂作杉木氣明淨者善久經風日或如雀屎者不佳合糯米炭相思子貯之則不耗減膏 唐本注云樹形似杉木言婆律膏是樹根下清脂龍腦是根中乾脂子似豆蔻皮有鎧甲即松脂也今江南有杉木未經試或方土無脂猶甘蔗之無實也 香字抄

千手合藥經云却布羅者龍腦香此也 西域記云秣羅矩吒国亦謂枳吒秣羅国南印度境 南濱海有秣剌耶山崇厓峻嶺洞谷深洞其中有羯布羅香樹松身異葉花果斯別初採既濕尚未有香木乾之後循理而折其中有香狀若雲母色如冰雪此所謂龍腦香也 宝香藥等抄○類聚名物考同

時珍曰龍腦者因其狀加貴重之称也以白瑩如氷及作梅花

片者為良故俗呼為氷片脳或云梅花脳番中又有米脳速脳
金脚脳蒼龍脳等称皆因形色命名不及氷片梅花者也清者
名脳油金光明経謂之羯婆羅香本草綱目
頌曰今惟南海番舶賈客貨之南海山中亦有之相傳云其木
高七八丈大可六七圍如積年杉木狀旁生枝其葉心圓而背
白結實如豆蔻皮有甲鎖香即木中脂也膏即根下清液謂之
婆律膏搗段成式酉陽雜俎云龍脳香樹名固不婆律無花實
其樹有肥有瘦瘦者出龍脳肥者出婆律膏香在木心中波斯
国亦出之断其樹剪取之其膏於樹端流出斫樹作坎而羮之
両説大同小異唐天寶中交趾貢龍脳皆如蟬蠶之形彼人云
老樹根節方有之然極難得禁中呼為瑞龍脳帯之衣衿香聞
十餘步外後不復有此今海南龍脳多用火煻成片其中亦容
雜偽入藥惟貴生者狀若梅花片甚佳也
珣曰西海波律国波律樹中脂也狀如白膠香其龍脳油本出
佛誓国從樹取之
時珍曰龍脳香南番諸国皆有之葉廷珪香録云乃深山窮谷
中千年老杉樹其枝幹不曾損動者則有香若損動則氣泄無
脳矣土人解作板板縫有脳出乃劈取之大者成片如花瓣清
者名脳油
宋洪芻香譜曰龍脳合黒豆糯米相思貯之不耗片々氷ノ如
クナルハ上品ナリ片脳トモ氷片トモ云クダケテ木皮相
交レルハ下品ナリ熟酒ニテ服スヘカラス九竅ヨリ血流
テ死ス大和本草
龍脳香乃膏香婆律膏蘇敬注云是樹根下清脂也龍脳根中乾脂一曰杉脂出蘇

敬注　本草和名

龍腦香

後陽成天皇文禄四年正月盧薈龍腦ヨクヽ乙色上　古賀敬上記

薫陸香

本草云其形如白膠出天竺罽于二國一名乳頭香一名滴乳香一名膠香一名白乳香一名雲華一名沉油（香字抄　薫集類抄）

苻堵莊嚴陀羅尼経云薩勒枳香（薫陸香也）千手合薬経云杜嚕香（薫陸香也）慈恩傳云阿吒釐國（南印度境）土出胡椒樹々葉似蜀椒出薫陸香樹樹葉類枇棠（ナシ）梨也（沈香薫等抄　類聚名物考）

茶曰薫陸香形似白膠香出天竺者色白出罽于者夾緑色香亦不甚（本草綱目）

珣曰按廣志云薫陸香是樹皮鱗甲采之復生乳頭香生南海是波斯松樹脂也紫赤如櫻桃透明者為上

禹錫曰按南方異物志云薫陸出大秦國在海邊有大樹枝葉正如古松生于沙中盛夏木膠流出沙上狀如桃膠夷人采取

賣與商賈無賈則自食之 同

時珍曰乳香今人多以楓香雜之惟燒之可分南番諸国皆有

宋史言乳香有一十三等按葉廷珪香録云乳香一名薫陸香

出大食国南其樹類松以斧斫樹脂溢於外結而成香聚而成

塊上品為揀香因大如乳頭透明俗呼滴乳又曰明乳次為瓏

香以瓏收者次為乳塌雜沙石者次為黒塌色黒次為鑪末播

揚為塵者觀此則乳有自流出者有斫樹溢出者諸説皆言其

樹類古松冦氏言類棠梨恐亦傳聞當從前説道書乳香檀香

謂之浴香不可燒祀上真口訣

薫陸ハ能く凡るへしあるへとゝ如交りしる夫をよく去り既

又能薫陸を琥珀の色して為重うあるよきを去るいとゝきを

取て松脂を似しるきを堅く色黒く含ま

わしるゝんるきをちるゝて含をよや 後伏見院薫物方

崇徳天皇大治四年三月忠盛以薫陸一裹来云是獅物乳香

中云近来号白膠香者欲雖似薫陸其香浅称膠香薫陸也称

白膠香非薫陸欲 長秋記

後水尾天皇慶長十九年十二月南部信濃守利直市前ニ倣

ス是ハ南部ノ領内ニ栗ノ林アル所ヨリ薫陸ヲ得テ持来

ルヲ秋上ニ及フ安藤帯刀并ニ安法印坂雪ス上意ニ云此

薫陸何レノ地ヨリ出ルヤ否ヤ如易アリ与安法印諍テ申

上ルハ日本ニ是アル薫陸ト琥珀因フメ唐ノハ則乳香ト

本草綱目ニ是アル由申上ル依テ本朝ノハ上琥珀ト云ヒ

玉露叢

焚薫陸香祈事

近衛天皇久安六年二月晦日一條殿仰曰彼岸中日午時燒薫陸以祈求一事白佛無不成就矣仍不動愛染王聖觀音前備佛供香花燈明至午時燒薫陸例香上敬之一條殿仰也滿三尊咒祈請立石宣旨名記

高倉天皇治承三年二月本尊前焚薫陸香祈請祈求午時焚之古人云無不果玉海

剃髮焚薫陸香

崇德天皇長承三年十二月上皇皇子剃髮条堂中所〻令施薫陸有異香令制止而停之長秋記

獻薫陸香

臘月御菓　薫陸香一兩二分延喜典藥式

宋人獻薫陸香

後一條天皇長元二年三月宋人贈書函條〻進上薫陸香貳拾兩〻〻詳載于麝香部

粘薫陸香汁

佛像を彩畫するに皮膠を用ひ佛像を彩畫するに皮膠を用ひ織たしき事し陀羅尼集經に彩に薫陸香汁を用ひ皮膠を用ひへ〻さらに〻〻〻〻仁王會誦法に香膠を以て塗しとなし香膠とは諸の芳草の根汁粘著をそふ塩尾

又

極て暑き時琵琶を引き汗ながして拭さし心よ〻す鈔中手をとゝ引きまる之を誤り笑しめ世の叶ふ薫陸を求して柔らかなる紙に塗付て懐よりまてさしけあらて拭清よ付へきの獨而化の叶ふ言をへき事なり　胡琴教編